

LEAD OFF MAN

リードオフマン

2022
MAY
Vol.4



灘校野球ファンサークル

目次

オンライン企画「最強ドラフト&ペナント」…02

NPB 12 球団 2021 年総括 & 2022 年展望

- ・ 東京ヤクルトスワローズ…04
- ・ 阪神タイガース…06
- ・ 読売ジャイアンツ…09
- ・ 広島東洋カープ…13
- ・ 中日ドラゴンズ…15
- ・ 横浜 DeNA ベイスターズ…17
- ・ オリックス・バファローズ…20
- ・ 千葉ロッテマリーンズ…23
- ・ 東北楽天ゴールデンイーグルス…25
- ・ 福岡ソフトバンクホークス…29
- ・ 北海道日本ハムファイターズ…31
- ・ 埼玉西武ライオンズ…34

2021 年大谷翔平選手の成績と今季の展望…41

トレード成功球団はどこ？…43

大谷翔平だけじゃない！打撃もできる投手特集…48

戦争直後のプロ野球のエースたち…51

オースティン・アダムス投手の 2019 年…55

あとがき…62

まえがき

本日は第76回灘校文化祭「Turn It Over」にご来場いただき本当にありがとうございます。今年も無事に部誌を刊行でき、心の底から安心しております。私が応援している阪神タイガースは開幕から盛大にズッコケましたが、無事に開幕して何よりです。

さて、当サークルも設立され早5年目を迎えまして、その存在がいくらか文化祭の中でも市民権を確立してきた感があります。次は人気展示を目指していく段階ですね。とは言っても、そんなに引継ぎが充実していないのでなかなか展示の向上を図っていくのは容易ではありません。僕やメンバーの作りたい展示を上手く表現するにはなかなかハードルが多いため、思ったようなものが出来上がっているかはわかりません。しかしクイズと部誌は手抜きせずに取り組んでいます。きっと、そこには我々の努力の結晶があるはずです。ぜひ楽しんでご覧ください。

灘校野球ファンサークル第5代総責任者 Marble

オンライン企画「最強ドラフト & ペナント」ルール解説

75 回生 Marble

この記事では当サークルの動画企画「最強ドラフト & ペナント」のペナント部分のルールがちょっと分かりにくいので解説します。まず、今回の企画はいわゆる「ファンタジーベースボール」を参考にしており、その中で何を用いて勝敗判定をするかということを考えました。ここで、打率のようなよく見る上に得点との相関がそんなに強くない指標を用いるよりも得点に沿うようにしたいと考え、様々な指標を検討した結果なぜか打撃分野は RC というこの部類のもののなかでは原始的なものになりました。RC とは、セイバーメトリクスの初期に先駆者のビル・ジェームズによって考案された指標で、チームメンバーの RC を合計するとだいたいチーム得点と一致するようになっています。詳しい式は少しばかり複雑でここに書くのが面倒なので省略します。気になる方はググってください。

さて、前置きでとても具体的な話をしてしまいましたが、ここから本題です。

1. チーム編成について

野手は指名打者を含む各ポジション一人、投手は先発 2 人と中継ぎ・抑え 3 人とし、我々が独自に付与したポジション適正に沿うように編成しなければなりません。沿わなかった場合は自動的に敗北となります。なお、編成していた選手が新型コロナウイルスに感染、または濃厚接触者となった場合はポジション適正を無視した入れ替えを行うことが可能です。

2. 試合スケジュールについて

毎週火曜日と金曜日からそれぞれ一週間の成績を集計します。対戦相手は毎回決まっていて、リーグ戦形式となっています。データは株式会社 DELTA さんから提供いただいております。

3. 使用する指標について

世の中には打撃、守備、走塁、投球それぞれや、分野横断的なものなど様々な指標があります。今回はその中から目的に応じて 4 つの指標を用います。

①RC

先述のため省略しますが、打撃部門の指標です。

②GBkwERA を用いた RSAA

何やら小難しい名前のもので出てきましたね。まずその名前から解説していきますと、GB は Ground Ball すなわちゴロのこと、k は三振、w は四球、ERA は防御率です。つまり(?)ゴロの割合と三振と四死球から疑似的に味方の守備の影響を受けない防御率を算出しようということですね。ゴロは長打になりにくいいため失点リスクが低く、また当然ながら三振を多く取れて四死球の少ない投手の方がいいのでそれに基づいた指標です。詳しい算出方法はこれまた複雑ですので式を直接掲載することはしませんが、代わりに参考にしたページのリンクを掲載します。

(<https://bo-no05.hatenadiary.org/entry/2022/02/06/012336>) ※必要に応じてアドレスバーに手入力するか、オンライン版から開くなどしてください。

そして RSAA は Runs Saved Above Average すなわち平均よりどれだけ失点を防いだかを指します。これにより傑出度を見ることができます。

③ UZR, UBR

2つまとめて紹介しましょう。映像から算出されるらしい、なんかすごい指標です。算出には技術力だとかリアルマネーだとかなんだとかいろいろ必要なので素人には到底出せるものではないです。平均から何点上かという得点単位で示されます。DELTAさんから提供していただいている部分については主にこちらとなります。

4. 勝敗決定について

打撃(RC)、投球(GBkwRSAA)、守備走塁(UZR・UBR)それぞれの合計で項目ごとの勝者を決めます。例えば、打撃と守備走塁で勝って投球で負けた人は2対1といった感じですね。

5. 順位決定について

① 勝敗

② 得項目数－失項目数

③ 直接対決の成績

以上の優先順位で優劣をつけ順位を決定します。

・さいごに

これを読んでもわからないという方がいたら申し訳ございません。もし現地においでの方はお近くのメンバーに、そうでない方は下記の Google フォーム

(<https://forms.gle/vGXtfgUSiJDwEUxd9>) からご質問ください。

NPB 12 球団 2021 年総括 & 2022 年展望

東京ヤクルトスワローズ

79 回生 権兵衛

1. 昨季総括

昨年のヤクルトは、2 桁勝利した投手がいなかったものの、村上、山田哲が 30 本塁打越え、外国人の活躍、チーム防御率の大幅改善などにより、リーグ優勝、日本一に輝きました。

(1) 投手陣

<先発>

右：小川、奥川、高梨（原、サイスニード、金久保）

左：石川、高橋、（田口）

去年は年間を通して投げたのが小川だけだったものの、夏以降から奥川、高橋が活躍し、原も怪我から戻ってきたことで後半戦は安定し、最終的に先発防御率はリーグ 3 位で持ちこたえました。

<リリーフ>

右：清水、梅野、今野、大下、大西、石山、マクガフ

左：田口、坂本

去年は今野、田口、近藤ら新戦力が加わって活躍し、いっきに選手層が厚くなりました。清水が NPB における歴代最高の 50 ホールドと勤続疲労も心配される中、後半も数字を落とさず投げてくれました。全体的な中継ぎのレベルが上がり、救援防御率が中日に次ぐ 2 位でした。

(2) 野手陣

1	8	塩見	.278	14 本	59 打点	B9
2	7	青木	.258	9 本	56 打点	
3	4	山田	.272	34 本	101 打点	B9
4	5	村上	.278	39 本	112 打点	MVP 本塁打王 B9
5	3	オスナ	.258	13 本	60 打点	
6	2	中村	.279	2 本	36 打点	B9 GG
7	9	サンタナ	.290	19 本	62 打点	

8 6 西浦 .223 5本 24打点

9 1 (投手)

去年は塩見の覚醒に加え、外国人は来日が遅れたのにも関わらず2人とも2桁本塁打を打ち、チームとして3割越えはしないもののチーム本塁打数1位、チーム得点数1位と破壊力抜群の打線。この打線がリーグ1位になれた最大の要因と言えるでしょう。2020年は怪我で29試合にとどまった中村が1年を通して出られたのも大きかったと思います。

2. 今季展望（4月16日時点）

去年、捕手としてチームを支えた中村が下半身の張りにより、今期絶望。この中村が去年扇の要としてチームを引っ張っていたのだと感じさせられますね。今年の始め絶好調だったサントナが下半身のコンディション不良のため一時帰国し（この穴も大きすぎる）、奥川が上半身のコンディション不良で二軍落ちなどがあり、チームとして逆風が吹いていますが、その中で塩見が去年のままの状態で活躍し、高橋奎二が防御率セリーグ2位、大卒2年目の木澤がここまで8回無失点、去年数字を大きく落とした石山選手がここまで安定したピッチングをみせていて、長岡、濱田、内山も若いながらも奮戦しており、現状9勝9敗で4位。主力の離脱が目立ちますが、高津マジックでなんとかしてくれると信じましょう！！

阪神タイガース

75 回生 Marble

こんにちは。灘校野球ファンサークル責任者の Marble です。この記事では阪神タイガースについて書いていきます。好きな選手は近本光司です。

1. 昨シーズンについて

僕は去年の部誌で「間違いなくここ数年で最強のチーム、巨人に並びがあれば圧倒的優勝も夢ではない」と書きました。実際とても強いチームでした。優勝チームとはゲーム差なしと、頂点まであと少し。何がいけなかったのでしょうか。考えられる要因を僕なりに整理していきます。

①ヤクルトがシンプルに強かった

とりあえずこれです。前評判は低かったものの、蓋を開けてみれば塩見選手の覚醒などもあって投打とも充実しており、特に終盤はどれだけ頑張っても追いつけませんでした。

②主軸がみんなで仲良く調子を落とした

前半戦の好調を支えたマルテ選手、佐藤選手、サンズ選手、大山選手などがこぞって不振に陥って打てなくなっていました。~~好不調の時期まで揃うなんて、素晴らしい団結力ですね。やはりマイペースな近本選手が最強です。~~

③中継ぎ投手のコマが足りなかった

岩貞選手が不調であった上、小林選手の負傷離脱、馬場・及川両選手の他には勝ちパターン以外で使えるリリーフがいないという状況で、安定していた岩崎・スアレス両投手に負担が集中してしまい岩崎選手も一時期調子を落としていました。こちらはシーズン前に僕が思っていた課題が現実のものとなってしまう悲しいです。ざっとこんなところでしょうか。僕には今回のV逸はしょうがないように思えます。今年は頑張りましょう。

2. 昨シーズン良かった選手たち

2.1. 近本光司選手

~~お前の好みだろうって？うるせえ！~~ 虎のリードオフマンはやはりこの男。例年通り安定して、序盤の3、4月は打率.222と不調だったにもかかわらず、最多安打を取ってしまうほどに5月からは打ちまくり、守備面でも安定感を示しゴールデングラブ賞、3年連続となる盗塁王こそ逃したものの走塁でも大きく貢献しました。初のベストナイン受賞にも僕は全く驚きませんでした。チームの中心として今後もその活躍を楽しみにしたいところです。

2.2. 中野拓夢選手

主に二遊間のバックアップとして期待されていたドラフト6位ルーキーは、オープン戦で盗塁死を量産し代走としては微妙かもしれないと思われながら、ショートとしては木浪・山本両選手に次ぐ3番手で開幕を迎えました。しかし途中出場で結果を残してレギュラー2人の不調に付け込み、そのままショートのレギュラーを奪取。4月からシーズン終了までその座を譲ることなくシーズンを完走、シーズン前には不安視されていた盗塁で、同タイトル獲得者としては史上最高の成功率で盗塁王を受賞しました。タイトルはこれだけでしたが、守備面ではエラーの多さと併殺獲得では課題を残したものの12球団トップクラスの守備範囲を見せつけ、技術の向上次第ではゴールデングラブ賞も狙えるという期待を抱かせてくれます。キャンプは故障でスロー調整となっていますが、今年もやってくれると期待しています。

2.3. ジェフリー・マルテ選手

怪我が多く主戦力としては計算できないことから安価で残留し迎えた3年目は、持ち前の選球眼が更に進化し三振より多くの四球を選んだほか、初めて20本塁打をクリアし、なんと無事に怪我なくシーズンを終えました。~~誰がフルシーズン彼を見られるなんて想像したでしょうか。~~今季も無事に来日し執筆時点では順調な調整を見せています。外国人選手嫌いの評論家からの評価はやたら低いですが、怪我さえなければチームの中心選手として頼れそうです。~~そろそろ怪我してもおかしくはないですが。~~

2.4. 佐藤輝明選手

矢野監督が4球団競合のクジを引き当て入団した名前通りの光り輝くゴールデルーキーは、前半戦を驚異的な成績で突っ走りましたが、後半は絶望的な不振に陥り終盤にはレギュラーから外れることとなりました。誰が見ても選球眼と体力面が付けば最強打者なので、持ち味が消えない程度に改善してほしいところ。三振とて所詮はアウト1つなので、三振を減らせとは言わないでも、もう少し四球が増えてくれたら日本一価値の高い打者にもなれそうです。

3. 今季の見込み

3.1. 野手

捕手：梅野・坂本

一塁手：マルテ・大山・小野寺・糸井・原口

二塁手：糸原・小幡・木浪・中野・高寺

三塁手：大山・佐藤輝・マルテ・原口

遊撃手：中野・小幡・木浪・山本・高寺

外野手：近本・佐藤輝・糸井・ロハス・小野寺・島田・江越・豊田（敬称略）

特にこの項で書くことはありませんが、昨年開幕前に見たメンバーよりちょっと強そうな気がしますね。実績がなかった人が実績をつけただけです。

3.2. 投手

先発：西勇・青柳・伊藤将・秋山・ガンケル・藤浪・高橋遥・アルカンタラ・

ウィルカーソン・村上・桐敷・西純・及川・二保・チェン

中継ぎ・抑え：岩崎・馬場・岩貞・藤浪・齋藤・及川・小川・湯浅・浜地・

ケラー・尾仲・小林・石井・小野（敬称略）

こうして見ると頭数はそろっていますね。先発に関しては特にかなり分厚いものになっています。やはり不安は中継ぎ陣でしょうか。全体的に良い時は素晴らしいものの崩れたときに見たくないというイメージの選手が多く、この人数でもブルペンを維持できるかは少し疑問です。まあ、なんとかなるやろ。こういう時は楽観するに限ります。

4. 期待の若手

やはりこの記事締めくくりにふさわしいのは未来への希望でしょう。異論は認めません。

4.1. 小幡竜平選手

守備センスへの評価が高い高卒4年目のショートは、フォームの改良で課題の長打力の向上を目指しレギュラーの座を狙います。来年は同世代の選手が大卒入団してくるだけに今年が勝負の年ですし、本人もこれまで以上に貪欲に取り組んでいるようなので今年こそは本当に期待できそうです。怪我は気を付けてほしいですね。

4.2. 村上頌樹選手

東洋大学からドラフト5位で入団した技巧派先発投手。二軍タイトルを大量獲得しました。二軍レベルでは制球面、奪三振能力共に優秀で、被本塁打を減らせば間違いなく先発ローテーションに入ってくる存在でしょう。

4.3. 高寺望夢選手

2020年のドラフトで阪神に入団した唯一の高卒選手で、昨季はプロの球への対応に苦労したのか二軍で打率.162と低調な成績でした。優れた選球眼が最大の持ち味で、それに加えて秋のフェニックスリーグでは打率5割超を記録するなど好調時の爆発力では誰にも負けません。~~嘘です、近本選手には負けるかもしれません。~~長野県出身ですがそばは苦手だそうです。

4.4. 小野寺暖選手

打率の残せる中距離砲。育成出身と言われてもにわかに信じられないくらいです。選球眼にも優れていて守備も悪くはないオールラウンドプレーヤーで、緊張からなのか変化球への対応に課題があるのか一軍ではまだ目立った活躍はしていないものの、能力には大きな信頼が寄せられています（当社調べ）。混沌とする外野争いに割って入ってくることに期待ですね。

優勝するぞ！！！！

読売ジャイアンツ

75 回生 victor

1. 初めに

こんにちは。今年も巨人の記事を書くことになりました victor です。去年も巨人を担当したのですが、去年の記事は初めて書いたということもあり、散々なものでした。去年の部誌をお手に取り、お読みいただいた方には申し訳ないと思っています、今年こそはまともな記事を書こうと思っているのでよろしくお願いします(この記事はだらしない筆者のせいで4月16日に大部分を書いています)。

2. 2021 年総評

昨シーズンは8月31日に首位に立ったものの、先発投手の中5日ローテーションや中継ぎ投手の疲労などで投手が試合を作れなかったり、投手が試合を作れても打線が沈黙したりして終盤大失速し、61勝62敗20分と3位で負け越しとなってしまいました。昨シーズン首位のヤクルトとの差としては投手陣の安定性はもちろん、ヤクルトは新外国人2人のサンタナ、オスナがハマった一方、巨人は3人の助っ人外国人がシーズン途中で帰国するという部分も大きかったように感じます。逆に言うと今シーズンを占う上で、助っ人外国人がハマるかどうかが一つのカギとなってきそうです。

3. 中田選手の加入について

昨シーズン加入した中田選手については様々な意見がありました。ここでも無視できないと思ったので筆者が思うこととともに書きたいと思います。まず、中田選手が巨人に加入した経緯については中田選手が8月4日のエキシビジョンマッチの開始前にベンチ裏で同僚選手に暴行行為をしていたことが判明し、11日出場停止処分が科され、謹慎となっていたところ8月20日に巨人に無償トレードで移籍するとともに出場停止処分が解除されたというものでした。自分が思うところとしては無償トレードとなるのは問題ないにしてもわずか9日出場停止処分が解除され、その後すぐ1軍の試合に出場したことや巨人への移籍会見の時に暴行事件に対する謝罪が行われたことがおかしいと思いました。1つ目のおかしいと思ったところは9日で解除したNPBの判断が他チームに移籍したから問題ないとなったため、暴行という行いに対して甘いと感じたところ、また前半戦不調だったため、試合に出るにしても二軍の試合から出場し好成績を残してから一軍の試合に上げれば批判の声も少なかったと思われ、なぜそうしなかったのだろうかというところ。また、暴行による出場停止処分だったことから昨シーズンはシーズン終

了まで謹慎すべきだという意見もありましたが、自分は無償トレードだといっても移籍した後の月数の年俸を支払う必要が巨人にはあるのでシーズン終了まで謹慎するならトレードした意味がなく、それならシーズン終了後にトレードすればよいのでその意見については反対でした。2つ目のおかしいと思ったところは日本ハム主導の謝罪会見がなく、巨人への入団会見の時に謝罪が行われたところです。謝罪会見を「日本ハムの中田翔」として行わなかったことに違和感を覚えるとともに言い方が良くないとは思いますが、責任を巨人に丸投げしたように自分には映ってしまいました。今後はこのような違和感を覚えるようなことがなければいいなと思います。ここまでいろいろと書きましたが結局のところ暴力行為は決して許されることではないのでそのようなことが行われないことを願うということで終わりたいと思います。

4. ポジションごと

〈i〉投手陣

〈i-i〉先発投手

右：菅野、山崎伊、赤星、戸郷、堀田、シューメーカー、アンドリース、戸田、直江、山口、畠

左：メルセデス、高橋、横川、今村

今年は若手の新戦力が次々に出てきてとてもうれしいシーズンとなっています。その中でもなんといっても今年のドラフト3位の赤星投手の安定感が素晴らしく、現在登板した3試合すべてで6回以上を投げ2失点以内での防御率1.80と大活躍を見せています。また、トミージョン手術明けの山崎伊織投手や堀田投手も将来のエース候補としてすでに先発し、期待できるピッチングを見せています。シューメーカー投手も老練さを感じるピッチングで、登板した2試合で安定感のある投球を披露しています。そしてまだ先発していないアンドリース、戸田、直江投手にも期待がかかりますし、昨年11勝を挙げブレイクした高橋投手も二軍でいいピッチングを続けているなど、今年は本当に先発投手候補が多く、昨年の苦しい中5日ローテーションのことを考えるとうれしい限りです。ひとつ言うなら菅野投手が開幕から少し安定感がなく、全盛期のピッチングと比べるとだいぶ見劣りするため心配ですが、ここから尻上がりで良くなっていくことを願っています。

〈i-ii〉リリーフ陣

右：大勢、楢原、畠、デラロサ、ビエイラ、山口、鍵谷、平内

左：今村、高梨、中川、大江

一方、リリーフ陣は苦戦を強いられています。昨年の勝ちパターンのデラロサ、ビエイラ、鍵谷、中川、大江投手が怪我や不振で一軍から離脱しており、先発からあふれた選手がロングリリーフをしたり、開幕から同じ選手が多く投げたりして、何とか

しのいでいます。しかし、大勢、楢原、今村投手はここまで素晴らしいピッチングを続け、開幕からブルペンを支えています。まず何といたってもドラフト1位の大勢投手。ここまでセーブ機会はきっちり試合を締め、リーグトップの8セーブを挙げています。独特の軌道でナチュラルシュートするストレートはもちろんのこと、佐々木大魔神投手から教わったフォークでも三振をとれるため素晴らしい活躍を見せています。大勢投手には去年の栗林投手のように新人王をとってもらいたいです（赤星投手と熾烈な新人王争いを繰り広げてほしいです）。そして、覚醒した楢原投手。150キロ越えのストレートをコントロールよく投げられるようになり、リーグトップの7ホールドを挙げ、いまだ防御率0.00と抜群のピッチングを見せています。また、今村投手も中川投手不在の中、左のセットアッパーとして6ホールドを挙げ、こちらもいまだ防御率0.00と抜群のピッチングを見せています。なんとかこの3人で持ちこたえて、実績のある選手の戦線復帰を待ちたいところです。個人的には二軍で好投を続けている育成の菊池大稀投手に期待しています。二軍で150キロ越えのストレート、スライダー、フォークを用いて奪三振率16.20という数字を出しており、近いうち支配下登録され、一軍で投げる機会もみられるのではないかと思います。

〈ii〉 捕手

大城、小林、山瀬

先発捕手は大城、小林両選手で回していくでしょう。捕手は疲労のたまりやすいポジションなので、固定せずに回していくのがいいと自分は思いますし、両選手ともいいところがあるので、それぞれの良いところを存分に発揮して、捕手としてチームを勝利へと引っ張って行ってほしいです。

〈iii〉 内野手

一塁手：中田、中島、ウィーラー

二塁手：吉川、廣岡、若林

遊撃手：坂本勇人、廣岡

三塁手：岡本

遊撃手と三塁手に関しては怪我や休養日でない限り坂本選手、岡本選手で固定でしょう。岡本選手はすでに4本塁打12打点、坂本選手は打率3割越えで2本塁打と両選手とも開幕から好調です。岡本選手はスローイング、坂本選手は甲子園で直近2戦3失策と少し心配ではありますが、どちらも昨年ゴールデングラブ賞をとった2人ですので調整してくれると思います。二塁手は開幕から吉川選手が絶好調で13試合連続安打と波に乗っているので、このまま攻守ともに頑張って、2回目となる規定打席到達をしてほしいです。問題は一塁手で、オープン戦では好調だった中田選手が不調で、中島選手がスタメンに入ることも多くなっています。中田選手の守備での貢献は大きいものがあるので、早く調子を取り戻してほしいです。

〈iv〉 外野手

丸、松原、ポランコ、ウォーカー、ウィーラー、梶谷、秋広

中堅手と右翼手に関しては、怪我や休養日でない限り丸選手、ポランコ選手で固定でしょう。丸選手は5本塁打13打点とリーグ2冠、ポランコ選手は得点圏での弱さが気になるものの選球眼を生かしたバッティングでここまでまずまずの成績を残しているので、両選手ともこのまま頑張ってもらいたいです。左翼手についてはここまでウィーラー、松原、ウォーカーの3選手が日替わりでスタメンです。昨年好成績を残したウィーラー、松原選手が共に不調なので、今後は守備に不安があるものの打撃は好調なウォーカー選手の起用が増えてくると思います。守備の分まで取り返すほどの打撃に期待したいと思います。また現在、投手陣では期待の若手が多く出てきましたが、野手陣では期待の若手が出てきてないので、二軍で打率3割越え、2本塁打と活躍している秋広選手が成長し、一塁手や外野でスタメン起用されることに期待をしています。

5. 最後に

現在巨人は12勝7敗で2位につけています。今年は期待の新人選手や今年出てきた選手が多く、見ていて楽しいシーズンとなっています。新選手と元々の戦力がうまく融合し、優勝できるように頑張ってもらいたいです。また、コロナウイルスにより、中止となる試合も増えているのでシーズン終了まで無事に開催されることを願っています。最後までお読みいただきありがとうございました。

広島東洋カープ

76回生 ゆうりん

1. 2021 シーズン振り返り

2021 年のカープは 3 位巨人と 2 ゲーム差の 4 位。個々の活躍がみられる一方、今一つ投打のバランスがかみ合わず一時期最下位に落ちるなど苦戦、歯がゆいシーズンとなった。

(1)野手陣

若手を含め、これから数年間安泰といえる打線が形成された。

主砲の鈴木誠は 4 番で.317 38 本で首位打者を獲得、5 年目の坂倉は捕手と一塁を兼任しながら 5 番を打ちリーグ 2 位の.315 12 本とブレイク。3 番西川は.286 12 本、6 番菊池は 16 本 60 打点と安定した活躍を見せた。

内野手は田中が不振から抜け出せず、20 年に活躍した堂林も不調の中で、ショートには 21 歳の小園が定着、主に 2 番で.298 を記録し 3 番も務めた。また、サードは同じく 21 歳の林がレギュラー取りに前進し.266 10 本と活躍。

さらには、固定できないセンターで野間が.272 9 盗塁と一歩抜け出すなど、全体的に打線が生まれ変わった。

(2)投手陣

先発ローテは表と裏の差がかなり激しく、先発防御率が 5 位に低迷する原因となった。九里が 13 勝（最多勝）、大瀬良が 10 勝、森下が 8 勝で先発三本柱を形成。裏ローテは玉村、床田が 3 点台、高橋昂と野村は 5 点台越えと安定感にかけ、途中から先発に回った大道も 4 点台とローテの層の薄さが現れた。

ただ、20 年のドラフト 1 位の栗林が防御率 0.86 で 37 セーブを挙げ新人王、2 位の森浦が 54 登板 3.17、3 位の大道も 7 先発を含む 24 試合に登板し、即戦力として期待された 3 人がそろって結果を残した。

中継ぎ陣はコルニエルが 50 登板 3.82、島内が 51 登板 3.12、塹江が 51 登板 4.25、ケムナが 40 登板 4.58 と、森浦を含め 5 人が勝ちバを務めるも安定しなかった。

2. 2022 年の展望

(1)野手陣

鈴木誠が抜けるものの、マクブルームを獲得するなど、打線は厚みを増している。さ

らに、昨年終盤に覚醒したといえる上本の起用にも期待がかかる。また、怪我で去年は満足に出場できなかった曾澤も復歸することから、打線はむしろ今年の方が強力になりそうだ。

スタメン予想と成績は下のよう。

7 西川 .290 15

4 菊池 .270 15

6 小園 .290 5

9 マクブルーム .270 25

3 坂倉 .330 15

2 曾澤 .270 15

8 野間 .280 15 盗

5 上本 .275 10 盗

控え 野間 宇草 大盛 堂林 長野 松山

(2)投手陣

三本柱に加え、玉村が覚醒の予感。床田が今年もローテに入ることになりそうで、20年にブレイクした遠藤も万全の状態でシーズンに入れるであろうことから、この6人でそれなりのローテが組めそう。そして、ドラフト1位の黒原をはじめ、若手の控えもいることから層の薄さも気にしなくてよさそう。中継ぎは栗林の疲労が気になるが、20年のドラフト3人組に加え、昨年不調だった塹江ケムナ島内あたりの復活、そして今年の中崎も戻ってくる。セ・リーグトップクラスの投手陣が揃うことになれば、優勝も狙いやすい。

3年連続Bクラスではあるものの、世代交代が完成に近づき、16-18年の3連覇の時期と重なる部分が多くある。4年ぶりの優勝に期待したい。

中日ドラゴンズ

76 回生 キンメタ

1. はじめに

みなさん初めまして「巨人」ファンのキンメタと申します。なぜ巨人ファンが中日の記事を書くんだと思われた方もいるかもしれませんが僕にもよくわかりません。記事の締め切り当日の午後2時に頼まれ（なぜ僕なのか…）現在締め切り（午後11時）の1時間前に帰ってきて書き始めたところでございます。本当になぜこうなったかよくわかりません…。さてこんな話はおいておくとして中日の話に戻しましょう。同じセリーグなので多少は知っていますが同級生がまとめてくれた資料を参考に説明していきましょう！

2. 投手陣

2.1. 先発ローテ

大野選手、勝野選手、柳選手、小笠原選手、高橋宏斗選手、笠原選手、福谷選手、松葉選手で回しています。名前をあげただけでもすごい投手陣ですね。ここでは柳選手の紹介をしていきましょう。昨年は最優秀防御率と最多奪三振の二冠に輝き、投球回数とHQS率でもトップでした。今季は巨人戦では5失点したものの~~（なんであの試合負けたんだ？）~~、その後は2連続完投と無双しています。今後の活躍にも期待していきましょう！

2.2. 救援

勝ちパはロドリゲス選手、岩寄選手の予定でしたが、岩寄選手が故障しそこに福選手などが入ってきました。祖父江選手の復帰で安定、清水達也選手が何故か3勝しています。

2.3. 抑え

ライデルマルティネス、相変わらず圧巻だけど去年に比べると若干球速が落ちていたかもしれないのが心配です。しかし安心して見ることができます。そして他球団は出てくると絶望します（だって打てる気がしないですもん…）。

3. 野手

基本オーダーが

1 番(中)大島

2 番(右)岡林

3 番(左)鵜飼、アリエル・マルティネス、(平田)

4 番(一)ビシエド

5 番(二)阿部

6 番(捕)木下

7 番(三)石川

8 番(遊)京田

9 番(投手)

代打枠が福留、山下、根尾 etc.

ホームラン不足が課題でしたが、阿部を中心にホームランが出始めています。石川と岡林の高卒3年目コンビが優秀ですね。ビシエドが不振、木下は当たりが出始めた。京田は相変わらず打撃はあまりよくない(今日(4/16)の試合を見ると打線がすごいことになっています)。

なぜかピッチャーの打率がよく、勝野がホームラン打ったり大野、福谷がマルチ安打を記録したり、モノマネ芸人柳がヒット打ったりとなかなかすごいです(そもそも今季投手打ちすぎです。森下選手とか戸郷選手とか)。

高橋周平の怪我でポジションの問題はあまりなくなりましたね。

4. 全体的に

接戦に強くなった。延長では負けなしのはず。中村ノリのおかげか打撃はなかなか上向きで、投手は相変わらず盤石。あと謎に8回に点数が入る。だから先発にあんま勝ち星がつかない。鶴飼や石川、岡林の新人の活躍が良い。根尾はなかなか試合に出られない印象。優勝するかも(あくまでも中日ファンの友達の感想です。巨人が優勝します)。

5. 最後に(by 中日ファン)

阪神…(巨人は二回負けましたので何も言えない…)

あかん中日優勝してまう

6. 最後に(by キンメタ)

ここまで読んでくださりありがとうございました。

横浜 DeNA ベイスターズ

77 回生 ウホホング

1. 昨年の振り返り

まずはデータで振り返ろう。

順位 6 位 (54 勝 73 敗 16 分 勝率.425)

打率.258 (2 位) 防御率 4.15 (6 位) 本塁打 136 本 (3 位) 盗塁 31 (6 位)

得点 559 (2 位) 失点 624 (6 位) 失策 73 (3 位)

※守備データに関しては最少の球団を 1 位とする。

正直開幕から今シーズンは厳しいかなと思っていたが、やはり最下位となると辛い。

2020 年は筒香嘉智のメジャー挑戦、山崎康晃の不振などを乗り越え 4 位でシーズンを終えた。ドラフトでは 1 位に明治大学の入江大生を指名し 2 位に中央大学の牧秀悟を獲得するなど、弱点の捕手を指名しなかったことを除けば概ね高評価のドラフトだった。井納翔一・石川雄洋・梶谷隆幸・ロペス・パットン等が退団し、ロメロを新外国人として獲得した。

この時点で前年と比較して弱体化が激しい…。ロメロに関しても正直メジャーでの実績からよくいる外れ助っ人だろうと考えており、ソト・オースティンの 2 人がどこまで活躍するかにかかっているだろうというのが開幕前の読みだった。

活躍どころか開幕に間に合わなかった。12 球団唯一である。

外国人がいない不完全な状態で始まったペナントレースだったが、開幕戦でいきなり逆転負けを喫すると引き分けを挟んで 6 連敗。さらに 4 月 9 日からは引き分け挟んで 10 連敗。4 月 15 日によりやく外国人を含めてチームの戦力がそろったものの、3 月・4 月の成績はなんと 6 勝 21 敗 4 分である。

5 月 14 日には自力優勝の可能性が消滅した。開幕 42 試合目での出来事である。これは 89 年の大洋以来のスピード消滅である。ちなみに 89 年の大洋は 47 勝 80 敗 3 分の最下位でシーズンを終えている。このころにはチラッとスポーツニュースを確認してはそっ閉じすることを繰り返しており、騒ぎまくっている阪神ファンを恨みながら生活していた。

風向きが変わったのは交流戦である。9 勝 6 敗 3 分という堂々たる成績を残し、その後も 6 月 25 日からは 5 連勝するなど復調ムード。ワンチャン A クラス狙えるのではないかと思うほどの勢いだったが、全くそんなことはなく普通に 6 位でシーズンを終えた。

2. 補強

ドラフトでは競合の末小園健太を獲得、2位には早稲田大学の徳山壮磨を獲得。課題の遊撃には高卒の栗飯原龍之介を獲得した。

日ハムをノンテンダーとなっていた大田泰示、楽天を自由契約となっていた藤田和也を獲得した。

新外国人には投手のB・クリスキーを獲得した。

3. 今期の展望

※筆者の主観が多分に含まれています。

(1) 投手

先発の柱として期待できるのは今永・大貫・濱口・ロメロ・東である。ロメロは昨季後半の成績が非常によく10勝ほど期待できるだろう。今永・大貫・東に関しては10勝超の成績を残した実績があり今年も十分期待できる。特に東は昨期最終盤で戦線復帰、見事な投球を見せてくれた。今年は15勝を狙えるだろう。濱口はほかの4人と比較すると多少劣るように見えるところがあるが、毎年必ず5勝は挙げるタフネスは見事である。

これ以外の投手では京山や石田があげられる。京山は昨年期待されながらも十分結果を残せていないが23歳と若いので彼が活躍すればチームは活性化すること間違いなしと考えられる。石田も昨季こそ不振だったものの先発中継ぎ問わずに実績があるので便利屋としても活躍が期待できる。

中継ぎとして期待できるのは山崎・三嶋・三上・エスコバーである。山崎は2020年の不調があったものの球界屈指の実績を持つクローザーで、今季結果を残してメジャーの夢をかなえてほしい。三嶋は山崎が不調の2020年にクローザーとして活躍。三振が取れるピッチャーとして貢献してほしい。三上は不振を乗り越えセットアッパーとして定着することを期待したい。エスコバーは言わずもがなである。

また、櫻井は昨期も30試合に登板しており今期もさらなる進化が期待できる。

(2) 野手

規定に到達した3割バッターが4人(佐野・桑原・宮崎・牧)もいるという超強力打線を有している。彼らにオースティンとソトを加えると12球団随一の打線が完成する。

問題は遊撃手と捕手。遊撃手は柴田・大和・倉本・森の4人で争う形になると考えられる。打撃不振に苦しむ柴田、守備が衰えつつある大和、怪我で出場機会が減った倉本、将来有望なもののプレーに確実性がない森と突き抜けた存在がいない。しかし森はまだ20歳と若く成長すれば日本一の遊撃手になるだろう。大和と森の世代交代がうまく

いけば遊撃のポジションは強みへと変わる可能性が十分にある。

捕手は伊藤光・戸柱・嶺井・高城・山本あたりがレギュラー候補だろうか。正直どの選手も打撃難で苦しんでいるので、調子のいい選手を出すというスタンスで行けばいいのではないかと。とりあえずドラフトかFAで捕手を補強するのが課題ではないか。

4. まとめ

書いているうちに今期への希望が湧いてきた。これは横浜の優勝は確実なのかもしれない。

執筆時現在（3月1日）横浜が負けるビジョンが見当たらない。これを皆さんが読んでいるのは5月2日か3日だろう。その時に横浜がぶっちぎりの首位に立っていることを祈りつつ、筆を置くことにする。

オリックス・バファローズ

76 回生 無能代理人

1. 総評

さてさて去年は惜しくも日本一は逃したものの、25 年ぶりのリーグ優勝を果たし、最高の一年でした。この流れのまま二連覇を果たしてほしいのですが、コロナによる離脱が重なったり、打線の不調で完全試合されたりと甘くないなあというのが現状ですね。この部誌が配布されるころにはどのチームが今年は強いとか、どの選手が調子いいとかわかり始めていると思うので、オリックスには1位にいてほしいのですが、現実見て3位を祈ることにします。ここからは今年の戦力分析をしていきたいと思います！

2. 投手陣

打線の援護の少なさと、とりリーフ陣の炎上によってあまり勝ち星が増えていませんが、かなり悪くない印象です。

2.1. 先発陣

右：山本由伸、山岡泰輔、山崎颯一郎

左：宮城大弥、田嶋大樹、山崎福也

昨年オリックスを優勝に導いた圧巻の投手陣です。つよい。昨年 NPB 史上 8 人目となる投手 5 冠を達成し誰もが認める日本のエース山本由伸は、今年もここまで3試合に登板し3勝、防御率 0.82 と素晴らしい投球を披露しており、今年も安心してみていられそうです。去年は故障による長期離脱でほとんど登板機会がなかった山岡泰輔も、ここまで3試合で2勝1敗防御率 0.92 と、かつてのエースが本来の姿で帰ってきました。去年8勝を挙げた田嶋大樹も、2試合に登板し勝敗はつかなかったものの、防御率 0.71 とかなり安定したパフォーマンスでかなり期待できます。こちら去年8勝をあげた山崎福也は3試合に登板し、防御率 3.20 とまずまずの成績を残しています。ただ、去年13勝を挙げ大ブレイクを果たし新人王となった宮城大弥は、現時点では防御率9点台、去年プロ初登板、そのままローテ入りを果たし日本シリーズでも登板を果たした山崎颯一郎は現時点では防御率7点台と、あまり本調子ではなさそうです。まだまだ本調子でない投手もいますが、二連覇には投手陣の活躍が不可欠なので、頑張ってください。

2.2. リリーフ陣

右：村西良太、バルガス、黒木優太、平野佳寿、比嘉幹貴、小木田敦也、張奕、(吉田凌)

左：山田修義、ビドル

去年活躍したヒギンスは帰国し、吉田凌は不調で二軍調整中と去年の中継ぎ陣とはかなりメンツが変わってきそうです。若手の小木田や張奕、昨年育成から復帰した黒木に新外国人のビドルなど、どこまでできるか不透明ではありますが、期待するしかないです。安定感のある比嘉や村西は昨年のようなピッチングを見せて欲しいです。平野は、すでに6登板で2回打たれているので心配ですが、それは去年も同じだったので、そのうち調子が上がってくると信じています。

先発、リリーフ陣と共に不安が残る現状ですが、なんとか、失点せずに試合を作ってほしいです。

3. 野手陣

チーム全体として、規定打席にのって打率.250に乗っている選手がおらず、投手の援護ができていないという数年前のオリックスを彷彿させるかなり悲惨な状況です。

3.1. 捕手

記事を執筆している時点では、打率は伏見が2割、若月は0割台、スタメンマスクをかぶることは少ないですが頓宮が.375と、打撃の実力は頓宮が少し抜けていると思います。

しかし、守備面では若月と伏見が少し抜けており、時と場合によって3人を使い分けていくことになりそうです。

3.2. 内野手

一塁手：バレラ、佐野皓大、ラベロ、T-岡田

二塁手：安達、太田、バレラ

三塁手：宗

遊撃手：紅林

去年ブレイクを果たした三塁手の宗と遊撃手の紅林は守備もうまく、打撃にもパンチ力があり、スタメンは揺るがないと思うので、今年は去年以上の成績を残してほしいです。

一塁手はT-岡田が開幕から出遅れており、新外国人のバレラやラベロなど日替わりでいろいろな選手を起用しているのが現状です。セカンドは安達が開幕から好調でしたが交錯の際に負傷してしまい離脱、太田やバレラにチャンスが巡ってきたので、この

チャンスをものにして欲しいです。

3.3. 外野手

吉田正、福田、杉本、後藤、佐野皓

吉田正は今年も首位打者を狙ってほしいですね。執筆時点ではあんまり調子よくなさそうですが…

昨年3割30本を達成し、本塁打王にも輝いた杉本も、現在打率1割台、本塁打も1本と絶不調なので、どうにか試合の中で復調のきっかけをつかんでほしいです。

福田は、序盤こそ不調でしたが現在は.250とまずまずの成績で、(チーム内では最高峰)守備でも貢献してくれています。

後藤や佐野皓は去年あまり活躍の機会がありませんでしたが、今季は開幕から好調が続いているので、不調の打線を活気づけて欲しいです。

4. 最後に

ここまで、長々と書いてきましたが、まだまだシーズンは始まったばかりです。期待している選手が活躍していて、オリックスがAクラスにいると信じて、締めとさせていただきます。ここまで読んでいただきありがとうございました。

千葉ロッテマリーンズ

76 回生 アラジン

1. 昨季の統括

前年優勝は逃したものの2位となり、昨季はこのままの勢いでリーグ優勝、日本一を勝ち獲りたいシーズンでした。

開幕前、前年途中加入した澤村拓一、チェン・ウェインがともに退団したものの、新たに遊撃手のエチェバリアを獲得しました。また、前年のドラフトでは、即戦力として期待される鈴木昭汰、河村説人ら5人、育成ドラフトでも4人を指名しました。コーチでは、元オリックス監督・森脇浩司氏を一軍総合内野守備コーチとして、松中信彦氏を春季キャンプ臨時打撃コーチとして招聘しました。

開幕戦は、自身初の開幕投手である二木康太がマウンドに上がるも5回途中5失点と乱調であり黒星スタートとなり、開幕カードはセットアッパーのハーマン、抑えの益田直也も打たれ、3連敗という走り出しとなりました。

だが、ハーマンと益田が復調し始めると、唐川侑己、佐々木千隼も好投を見せ、この4人らによるリーグ屈指の中継ぎ陣が構成されました。そんな中継ぎに加え、1番・荻野貴司、2番・マーティン、3番・中村奨吾、4番・安田尚憲という上位打線が機能していきましました。4月21日の日本ハム戦では、岡大海が球団20年ぶりの逆転サヨナラホームランを放ち、「ヒロミナイト」と命名されました。

しかし、前半戦は離脱者が相次ぎました。先発の石川歩、美馬が不調で離脱、中継ぎのハーマン、唐川もそれぞれ腰痛、首痛で離脱し、投手陣が苦しくなりました。さらに、捕手の田村龍弘、柿沼友哉、吉田裕太が離脱し、捕手が危機的状況になりました。そんな中でも、佐藤都志也が捕手のスタメンに座り奮闘しました。

そんな離脱者の穴を埋めるため、6月には補強を決行。DeNAとのトレードで国吉佑樹を獲得、また、先発のロメロも獲得しました。さらには、中日とのトレードで加藤匠馬も獲得し、充実したメンバーが揃い始めました。

前半戦は3位で終えたものの、後半戦からは再び戦力が整います。トレードで加入した国吉が勝ちパターンに定着すると、打線もかみ合い始め、9月5日には単独首位に浮上します。そこからは、佐々木朗希も登板するなど、前半戦奮わなかった先発陣も安定し、首位独走を続けます。

ただ、9月半ばにマーティンが骨折で離脱すると、徐々に打撃陣の調子が落ち始め、オリックスとの差がどんどん狭まってきます。

オリックスとの優勝争いは最後までつれこんだものの、10月14日には51年ぶりの優勝マジック9が点灯するなど、意地を見せます。しかし、シーズン141試合目の10月27日の楽天戦で敗れ、優勝を逃し、結果的に2位で終えました。

クライマックスシリーズでも、ファーストステージは突破したものの、ファイナルステージでは1勝もできず、完敗でシーズンを終えました。

2. 今季の展望

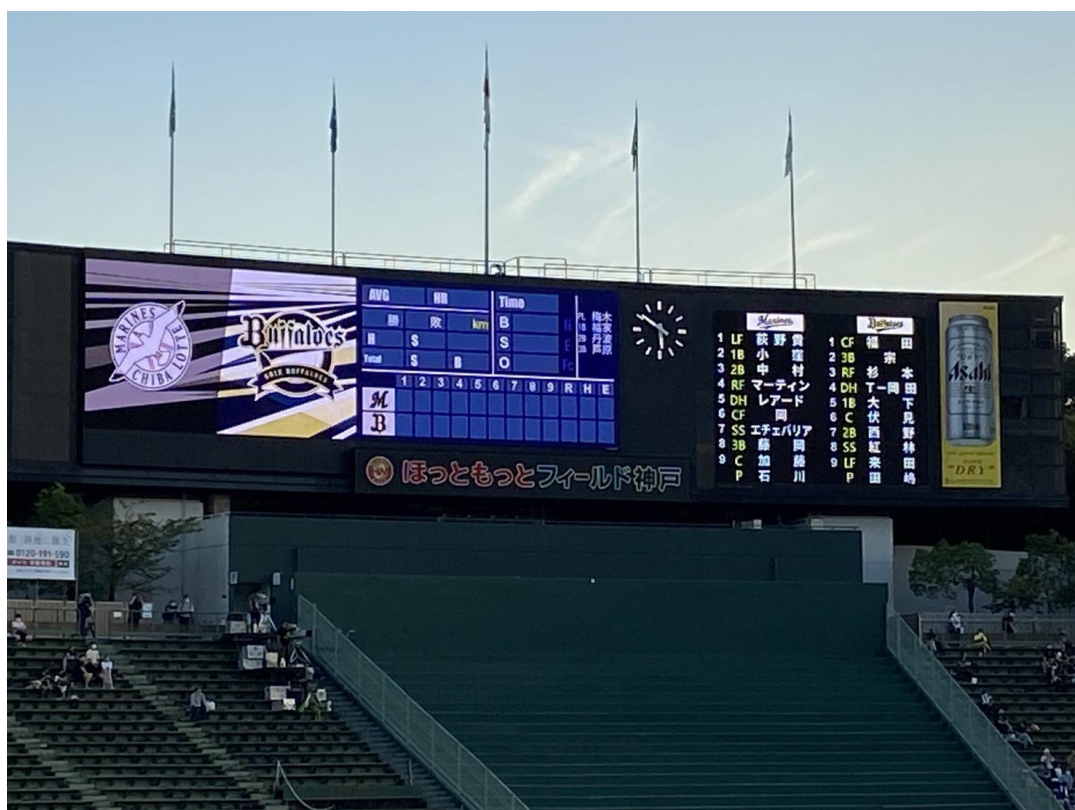
2年連続で優勝を逃したものの、2年連続2位で間違いなくチームの力は上がりつつあり、今季こそ優勝を狙える位置にいます。

ハーマン、フローレスが退団、南昌輝、鳥谷敬、途中加入した小窪哲也が引退したものの、新たに中継ぎでゲレーロを補強。

ドラフトでは、ドラフト1位で捕手・松川虎生を指名するなど5人を指名し、育成でも4人を指名しました。

~~また、昨年1月に球団規則違反を犯して無期限謹慎処分を受けた清田育宏は、5月に再度不倫したことが報じられ、契約解除になりました。~~

パ・リーグ6球団の中では、前回のリーグ優勝が最も遠ざかっている球団ですが、今年こそは歓喜の瞬間を見せてくれるはずです。



東北楽天ゴールデンイーグルス

76回生 ゆうりん

1. 開幕前

1.1. 2020 シーズン総括

2020年の楽天は4位に終わったものの、リーグ内で打1位(.258)、本塁打2位(112)、得点1位(557)、OPS1位(.743)と攻撃面では抜きん出ている。一方で、防御率は先発救援共に5位、QS率も42.5%で5位と投手陣には課題が残るシーズンとなった。また、ここ数年指摘され続けている機動力不足は継続しており、盗塁数は67でリーグ最少、さらには失策こそ48とリーグ2位につけるも、UZRは-8.7でリーグ5位であり、守備走塁面でも課題があった。

1.2. 投手陣

2020年のローテは涌井以外計算できなかったと言えるレベルで、これが投手陣崩壊の大きな原因であることは明確だった。メジャーから田中が帰国し楽天入りが決まったこともあり、経験豊富で期待できる涌井と田中、20年は絶不調ながらも後半無傷の7勝を上げた岸、ドラ1ルーキーの早川、復活を目指す則本、そして19年6位指名ながら着実にアピールを重ねてきた瀧中の6人でそれなりに計算できるローテが組めるようになった。さらに弓削や藤平、後半は谷間で塩見や辛島がここへ割り込んでいくという構図で、層の厚さも十分と思われた。

中継ぎについては、20年は三振が奪える投手が少ないことが課題で、森原牧田ブセニッツを中心に回したものの炎上し中継ぎで試合を落とすことも多かった。ただ、21年は前年先発転向していた松井が抑えに復帰、酒居、森原、牧田、ブセニッツの実績ある投手陣に加え、津留崎、菅原、渡邊、内間、高田萌、寺岡といった若手の活躍も見込まれ、ブルペンは完成度が高いとの評価だった。

1.3. 野手陣

21年のオープン戦では若手の辰己や小郷が好調、浅村、鈴木、島内を中心に強力な打線が形成できそうであった。ポジション別にはショート小深田、サード茂木、セカンド浅村、ファースト鈴木、キャッチャー太田、外野はレフト島内、センター辰己がレギュラーとして1年間定着することが期待された。一方、体力面で問題のある選手が多く、20年はDHが休養のために使われることも目立ち、さらには攻撃面で大きなプラスを出していたロメロが退団したことから、1年を通して打線が好調を維持することは難しいという評価だった。

全体として、機動力の改善はあまり期待できず、ロメロが抜け、新外国人のディクソ

ンとカスティーヨも来日が遅れることから、長打力不足も指摘されていた。

2. シーズン総括

(1) 3-4 月

本拠地での日本ハムとの開幕戦は、1 回裏に 2021 年プロ野球 1 号となる辰己の先頭打者初球本塁打が飛び出すと、打線が爆発し 8-2 で快勝。涌井が史上初となる 3 球団での開幕先発勝利投手となった。

2 戦目は先発予定だった田中が怪我で抹消、代役で高田萌が登板するも、2 回 2/3 イニングを 4 失点と試合を作れず、9 回にはブセニッツが 3 失点するなど投手陣が崩壊し 4-9 で敗戦。

その後は、3 戦目に早川がプロ初勝利を挙げるなど、3 月は 3 連勝で終了。

4 月は最初のロッテ戦で瀧中が 1 回 2/3 を 10 失点と大乱調、代わった菅原も 2 回 2/3 を 5 失点と炎上し、4-16 で敗戦。ちなみに瀧中はこのあと、この試合を抜くとシーズン防御率が 1 点になるほどの好投を見せることから、この試合でなぜ炎上したのかは未だに分からずじまいとなっている。

4 月 6 日の西武戦では辰己が 2 本塁打を放つなど、今シーズン初の 2 桁得点を奪い大勝。8 日には瀧中が無失点の好投を見せリベンジ、やや決定力にかけ得点不足に悩む試合が見られたものの、投手陣が粘りを見せたこともあり、3-4 月を 14 勝 9 敗で首位といいスタートを切った。

新外国人については、4/23 の西武戦でカスティーヨが 3 番ライト、ディクソンが 5 番指名打者で日本で初めての先発出場。しかし、カスティーヨが第 2 打席で怪我で交代、長期離脱を余儀なくされた。

(2) 5 月

勝ち試合を落とす場面が増えるようになる。2 日のロッテ戦では 9 回に松井が荻野にソロを浴び敗戦、5 日にもセーブ失敗と不振に陥る。これはまだいい方で、ローテの一角だった涌井が 5 月以降大失速。7 日の日本ハム戦では 6 回 6 失点、14 日のオリックス戦で 3 回 4 失点と調子が上がらず、正捕手を務めていた太田光も打率が 2 割を切ることがあるなど不調で、田中や足立がスタメンに入ることもあった。

一方、岡島が代打やサブスタメンなどで結果を残し、5 月初頭からライトのスタメンに定着。

16-19 日にかけては 1 点差で 3 連勝するなど調子を戻し、前半戦最後の試合もロッテを 6-5 で下し、早川が 6 勝目を上げるなど、23 勝 17 敗といい形で交流戦に入った。

(3)交流戦

巨人との3連戦は最初の2試合を貧打で落とすも、27日は瀧中が6回無失点、酒居宋松井とつなぐ理想的な投手リレーで交流戦初勝利。

6月2日のヤクルト戦から6月8日の中日戦まで6連勝するも、最後のカードの阪神戦で3連敗。1点差負けが2試合と、嫌な形での終了となった。

交流戦は9勝8敗1分けで6位だった。

(4)6月

シーズン再開後は4試合で5得点と打線が低調、阪神戦と合わせて7連敗を喫するも、その後は4連勝。6月終了時点で36勝30敗の2位と首位争いを展開していた。

(5)7-8月

6月30日の完封負けから7月5日まで5連敗。涌井に加え早川も不振に陥り、則本、田中にも打たれる試合が出てきたうえ、打線が前半に比べて得点を取れず、借金を抱えることはなかったものの徐々に優勝争いから遠ざかった。一時期は4位ソフトバンクに0.5ゲーム差に迫られるなど、苦しい時期だった。その中で、8月下旬に松井裕樹が長期離脱。9回が固定できなくなったことで、中継ぎ陣の負担が増えることになった。

8月終了時点で46勝42敗、8月27日にロッテに抜かれ3位転落、首位とは3.5ゲーム差がついた。

(6)9-10月

涌井のローテ枠に弓削が定着。打たれる試合もあったが、毎試合それなりに試合を作り、成長を見せた。9月中旬からは小深田に代わり山崎がショートのスタメンに定着、これ以降はほぼすべての試合で1番を務めた。1点差2点差で落とす試合が多く、投打がかみ合っていない状態が最後まで継続。反撃らしい反撃もなく、9-10月は20勝20敗、最終的に66勝62敗の3位でシーズンを終えた。

クライマックスシリーズは相変わらずの試合展開で、4-5、4-4で終戦となった。

2.1. 投手陣

投手陣は全体的に誤算が発生しても補うことができた部分も多く、近年になく上出来だったのではないかと考える。

開幕2戦目早々に田中が怪我で離脱。3週間ほど復帰が遅れることになった。早々にブセニッツと牧田が故障離脱、8月末にはクローザーの松井が離脱し、西口、安樂、酒居、宋が交代で抑えを務めるも、苦勞する試合が多かった。ローテとしては開幕前にもっとも計算できると思われていた涌井が不調で、そこを埋める投手が出てこず、層の薄さが露呈した。

2.2. 野手陣

とにかく夏場以降打線がつながらなかった。リーグ最多の 1085 残塁を記録（1 試合平均約 7.5 残塁と考えるとかなり多い）、鈴木島内浅村で 51 併殺打を上げるなどリーグで 2 番目に多い 100 併殺打を記録。また、岡島をはじめ、シーズン終盤に調子を落とした選手も目立ち、結局例年通りの夏秋になってしまった。

一方、山崎の覚醒、岡島と茂木が久しぶりに規定到達、辰己が 2 桁本塁打など、一定の収穫はあった。

3. 2022 年の展望

(1) 投手

既存のローテ 6 投手に加え、19 年ドラフト 2 位の高田孝、21 年にブレイクした西口などが加わり、層の厚い先発陣が今年こそ完成しそうだ。中継ぎも、酒居と宋が出遅れたものの、松井、ブセニッツ、安樂を中心に安定したブルペン陣が形成されており、夏以降 21 年の勝ちパ組が戻ってくると考えると、1 年を通していい形で戦えそうだ。

(2) 野手

日本ハムからノンテンダーで西川を獲得。楽天に足りない機動力が彼 1 人で解消できるほどの補強であり、1 番レフトでスタメン定着できるかどうか。

新外国人ではマルモレホスとギッテンスを獲得、1 年目からの活躍が期待される。スタメンは以下のように予想する。

7 西川 6 山崎 4 浅村 9 島内 0 マルモ 3 鈴木 5 茂木 2 炭谷 8 辰己

戦力的には例年以上に充実しており、独走優勝も狙える状態である。9 年ぶりの優勝を果たせるか。

福岡ソフトバンクホークス

76 回生 アラジン

1. 昨季の統括

前年 3 年ぶりのリーグ優勝に日本シリーズ 4 連覇という栄冠を手にし、絶対王者として迎えた昨季。この年も圧倒的な戦力で優勝が期待されていました。

昨季は、元侍ジャパン監督の小久保裕紀氏をヘッドコーチに招聘。内川聖一、ムーアらがチームを去ったものの、新たに日本ハムからマルティネス、メジャーからレイを獲得し、先発陣を強化しました。また、前年のドラフトの支配下指名では 5 人とも全員高校生を獲り、育成指名でも 8 人獲るなど、比較的育成寄りの指名となりました。



新たに 2 外国人を獲得し強化した先発陣ですが、2 人とも来日が開幕に間に合わず。また、前年三冠のエース・千賀滉大もふくらはぎのコンディション不良、さらには前年開幕投手・東浜巨もコロナ感染により出遅れるという事態になり、開幕前から先発陣が厳しい状況になりました。

開幕戦は、開幕投手・石川柊太が 7 回 1 失点の好投を見せ、ロッテに 8-2 で勝利し、開幕カードは 3 連勝で絶好のスタートダッシュを見せました。しかし、次のカードから先発陣が崩れる場面が多くなり、開幕前に危惧されていた事態が起きてしまいました。

そんな中でも、セットアッパー・モイネロ、津森有紀、泉圭輔ら中継ぎ陣の投球が光り、打撃陣も柳田悠岐を筆頭に、栗原陵矢、グラシアル、中村晃らが牽引。そして、マルティネスが 5 月から合流し、5 月度の月間 MVP を獲得する活躍もあり、5 月終了時点でソフトバンクは首位に立ちました。ただ、6 月以降は投手と野手の歯車がかみ合わず、前半戦は 4 位で終わりました。

加えて、今季は怪我人が続出しました。4 月に守護神、森唯斗が左肘を故障すると、5 月にグラシアルも骨折。モイネロ、周東佑京らも故障し、後半戦は苦しい戦いが強いられることになりました。

後半戦は千賀が復帰。千賀、マルティネスが先発陣を引っ張るものの、森、モイネロの勝ちパターンを失った中継ぎ陣の損失は大きく、接戦を落とす試合が増えました。野手陣も、後半戦はレギュラーが軒並み不調に陥り、なかなか打線がつながりませんでした。それでも、三森大貴、リチャードら若手が出場機会を増やし、若鷹の流れも生まれ

ました。

最後まで浮上することができなかったソフトバンクは、工藤政権初の B クラスである 4 位でシーズンを終えました。

2. 今季の展望

リーグ優勝、日本一を奪還するため、昨オフは大きな改革が行われました。

まず、2015 年から監督を務めていた工藤公康氏が退任。後任には、昨季は二軍監督を務めていた藤本博史氏が就任。長年ホークスのコーチを務め、選手のことをよく知るであろう藤本監督に期待がかかります。

また、サファテ、川原弘之、高谷裕亮、長谷川勇也が引退し、マルティネス、渡邊雄大、川島慶三、釜元豪、アルバレスが退団しました。加えて、古谷優人が窃盗により退団しました。

そして、新たに、チャットウッド、ガルビス、FA で中日から又吉克樹を獲得しました。なお、又吉の人的補償により岩寄翔が退団しました。さらに、去年 8 月に退団したレイがソフトバンクに復帰しました。

ドラフトでは、1 位で最速 157km/h の風間球打を指名。背番号 1 を背負い、将来のエースとしての期待がかかります。他にも、投手では 3 位・木村大成、5 位・大竹風雅を指名、野手では 2 位・正木智也、4 位・野村勇を指名。特に、野手の 2 人は即戦力での活躍が望まれています。

今季こそは接戦をものにし、リーグ優勝、日本一を奪還してほしいです。常勝軍団の復活を望みます。



北海道日本ハムファイターズ

76 回生 hamfan

1. 昨季総括

昨季の日本ハムは、55 勝 68 敗 20 分で 5 位という結果に終わりました。ただ最終カードで最下位から脱出するなどの底力を見せ、また数多くの若手が台頭する等、明るい要素も多いシーズンではありました。シーズン序盤はかなり負けが込んでいましたが、後半戦は勝率ほぼ 5 割で最下位脱出、栗山監督の最終年最下位は回避しました。

2. 投手陣

ここからは、昨季及び今期の日本ハム投手陣を選手ごとに見ていきます。

①上沢直之（12 勝 6 敗 防御率 2.81）

2020 年に大怪我から復帰しチーム最多の 8 勝を挙げた右腕は、昨季開幕投手を務め、そこから 1 年通してエースとしての活躍を見せました。開幕から 2 戦こそ大量失点で敗戦投手となるも、そこからは立ち直り圧倒的な投球。終わってみれば全 24 登板のうち実に 21 登板で QS、13 試合で HQS を記録し、キャリアハイの 12 勝、防御率 2.81 を残しました。今期も好投を続け、エースの座を守り抜くことを期待します。

②伊藤大海（10 勝 9 敗 防御率 2.90）

2021 年鳴り物入りで入団した道産子ドラ 1 ルーキー。開幕からいきなり初登板からの連続イニング奪三振記録に並ぶ快投を見せ、交流戦では最多勝・最優秀防御率の 2 冠で日本生命賞を受賞、侍ジャパンにも選出され東京五輪の金メダルにも貢献しました。10 勝に王手をかけてからしばらく勝ちが付きませんでした。シーズン最終戦で 2 桁勝利を達成、新人特別賞も受賞しました。今期は序盤から制球に苦しんでいますが、最終的に昨季を上回る成績を残してくれることを期待します。

③加藤貴之（6 勝 7 敗 防御率 3.42）

2021 年、飛躍を遂げた左のエース。昨季は抜群の制球力を生かした投球で初めて規定投球回到達し、与四球率では山本由伸を上回り 12 球団トップの数字を残しました。終盤の楽天戦ではプロ初完投初完封も挙げ、課題だった 3 巡目以降への対応力も示しました。今期も昨季と変わらぬ落ち着いた投球を見せてくれるはずです。

④堀瑞輝（3 勝 2 敗 39H 防御率 2.36）

2021 年覚醒したリリーフエース。昨季は自己最多となる 60 登板で 42HP を挙げ、最優秀中継ぎのタイトルを獲得しました。力強いストレートと変化の大きいスライダー

ーで三振の山を築き 7 回に定着、安定した投球を見せました。今期も昨季と変わらぬ投球でセットアッパーの座を守り抜くことを期待します。

⑤北山亘基（2022 年新入団）

2022 年新たに加わったドラフト 8 位ルーキー。オープン戦からドラフト順位を思わせる投球で奪三振率は驚異の 19.50 を記録し、新体制の守護神に定着しました。開幕後も無失点投球を続け、チームの勝利に大きく貢献しています。これからも安定した投球を続け、チームを勝ちに導くことを期待します。

この他にも、先発では立野、河野、バーヘイゲン、中継ぎでは杉浦、ロドリゲス、井口、宮西、玉井といった投手たちが好成績を残し、12 球団でもトップクラスの投手陣を形成しました。今期は開幕から投手陣は苦しんでいますが、最終的には昨季同様の投手王国が築かれていることを期待します。

3. 野手陣

続いて、昨季及び今期の日本ハム野手陣を選手ごとに見ていきます。

①近藤健介（打率.298 11 本 69 打点）

言わずと知れた日ハムを代表する打者。昨季は開幕からなかなか打率が上がらず苦しむも、最終的には打率.298 を記録。打率 3 割こそ届きませんでしたが、自身初となる 2 桁本塁打を放ち、4 番も務めました。今季はチームを引っ張る打撃を見せるとともに、自身初となる首位打者のタイトルを獲得することにも期待します。

②野村佑希（打率.267 7 本 37 打点）

4 年目を迎える期待の若手。昨季は主に 3、4 番を打ち、自己最多となる 7 本のホームランを放ちました。打率も前半戦は 3 割をキープしていましたが、疲れが出たのか最終的には打率.267 となりました。今季はさらなる飛躍を遂げ、日本を代表する三塁手へと成長することを期待します。

③万波中正（打率.198 5 本 13 打点）

覚醒間近の若手大砲。昨季は一軍で 5 HR を放ち、まさに「当たれば飛ぶ」ところを見せつけました。今期はオープン戦前半に大活躍し、一時は打率 4 割、ホームランも 5 本放ちました。オープン戦後半から開幕後にかけてはボール球を振っての三振が目立つようになりあまり結果を残せていませんが、パワーは間違いないものがあり、覚醒に期待が寄せられます。

④レナート・ヌニェス（2022 年新入団）

2022 年新たに加わった外国人。メジャーで 30 本を放った実績も持ち、長距離砲として期待が寄せられます。オープン戦は絶好調も開幕してからややゾーンについてい

けていない印象がありますが、そこを克服すれば好成績を残してくれるはずです。

昨季の日本ハムの野手陣はかなり苦しみましたが、今年はヌニエス、アルカンタラの加入や、野村を筆頭に万波、五十幡、今川、水野といった若手たちの躍動で、近藤を中心とした強力打線が形成されることを期待します。

4. 今期展望

今期の陣営はこんな感じでしょうか。

先発：上沢・伊藤・加藤・立野・河野・ガント・ボンセ

中継ぎ：堀・北山・ロドリゲス・杉浦・宮西・玉井・吉田・古川

捕手：宇佐見・清水・古川・郡

内野手：ヌニエス・アルカンタラ・野村・石井・渡邊・清宮・水野

外野手：近藤・松本・浅間・万波・今川

投手陣は今年もそこまで不安はいらない布陣が完成。先発は上沢・伊藤・加藤の三本柱に加え、若手の立野・河野に新外国人のガント・ボンセが加わります。中継ぎも盤石の堀を8回に据え、その後の9回を締めるルーキー北山が鍵になりそう。実績豊富な宮西・玉井も安定感があります。個人的には4年目の吉田にも期待。キャンプで藤川球児氏の指導を受けストレートの質が格段に上がり、一軍の舞台で活躍を見せています。

昨季苦しんだ野手陣は、課題だった長打力をヌニエス・アルカンタラの新外国人コンビでどこまで改善させられるかが鍵になりそう。加えて覚醒の兆しを見せている清宮・万波の2人が1年通じて成績を残せば、他球団に引けを取らない野手陣が完成しそうです。更に開幕から1カ月で打率4割と絶好調なのが、プロ11年目の松本剛。彼がこの調子をどこまで維持できるのかも、昨年から西川、大田が抜けた外野陣にとって大きな鍵となりそうです。

最後に、今期の日ハムはBIGBOSS こと新庄監督を新監督に迎え、新体制で挑む1年となります。4/17時点で7勝12敗とやや苦しんではいますが、若手中心の未来があるチームでチーム状況も上を向いてきており、ここから巻き返してCS進出、そして優勝、日本一まで到達することを期待します。佐々木朗希にも勝った(?)ことだし！

埼玉西武ライオンズ

77 回生 Chronostasis

1. はじめに

最初に言っておくと、私はオリックスファンです(??)。どうしてもオリックス・バファローズは人気球団なので既に執筆希望者がおられ、私は西武ライオンズの記事を書くこととなりました。書けるのか?と思われる方も多いでしょうが、同じパリーグであり、かつ西武はかなり好きな球団なので、ある程度のものは書けると信じています。この記事では近年の西武を軽く振り返り、昨季の振り返り及び総括と今季の展望を述べていくので、プロ野球ファンの方にはご一読いただければ幸いです。

2. これまでの西武ライオンズ

2018・19 年と投手陣には課題を残しながらも、”8 点取られたら 9 点取ればいい(※)”という圧倒的な打線でリーグ連覇を達成した西武ライオンズ。山賊打線のまさに暴力的な恐ろしさを世間に知らしめることとなった。(※2018/4/18 の西武-日ハム戦参照)

しかし、その裏で秋山・浅村・菊池・牧田・炭谷・野上といった、本来長く中核を担うはずの主力が流出。昨季炭谷が巨人から楽天へ移籍したことにより、涌井・岸・炭谷・牧田・浅村という西武の V メンバーが 2 世代に渡って楽天に集結するという珍事(?)が発生した。楽天では石井一久(自身も西武在籍経験あり)が GM に就任して以降、選手からコーチまで西武在籍経験者が多くみられることから「楽天ライオンズ」などによく揶揄されているがこれでは仕方がない。

20 年には森脇・平良・増田で勝利の方程式を形成、田村・小川・宮川・ギャレットらも加えて強力な中継ぎ陣を再建したものの、前年 12 勝をあげたニールの不調もあって先発陣が崩壊。打線は木村・秋山・金子という外野陣の変えが効かない状況で秋山が移籍も、補強はスパンジェンバーグのみ。更には主軸である山川・森・中村が揃ってまさかの低迷。昨年王者の意地か、中継ぎ陣の奮闘の甲斐あってなんとか A クラスに滑り込んだが、限界の見たかなり苦しいシーズンだった。

そうして迎えた昨季(21 年)、結果から言えばまさかのリーグ最下位。西武が最下位となるのは 1979 年以来 42 年ぶりというから驚きだ。いやすごい。1979 年といえばイギリスではサッチャーが首相に就任し、かの有名な SF ホラー映画『ALIEN』が公開された年であり、それ以降 1 回も最下位になっていないというのは流石である。1980 年台の西武は秋山幸二や清原和博、O.デストラーデに現監督の辻発彦らを擁して黄金時代を形成していたから、当時の西武のイメージが強い層も多いのではないだろうか。少し脱線したが、次項では昨季の西武ライオンズの戦いぶりを振り返っていかうと思う。

3. 昨季の西武ライオンズ

143 試 55 勝 70 敗 18 分 勝率.440 得点 521(5) 失点 589(6) ()内数値はリーグ順位

チームの大まかな成績であるが、見て取れるように打ててないし、守れていない。どうしてこうなってしまったのか。

(1) オフ強化とドラフト

20 年ドラフトで西武はおかわりくん三世こと渡部健人内野手をドラフト 1 位で指名するサプライズを行い、2 位には即戦力として社会人左腕・佐々木健を指名したが、全体的に見ると打線の世代交代を見据えた野手中心の指名だった。投手が少ないのは前年に宮川、浜屋、上間らなど投手中心のドラフトを行った影響が大きいだろうが、課題の先発も今井や松本、高橋に加え若い選手は多くいるため、彼らの成長に期待したのかもしれない。

また、オフでは多和田や野田らが戦力外となり、新規加入は新外国人先発のダーモディだけだった。多和田といえばあの深く沈み込む投球フォームからはなたれる独特なスライダーが特徴的な 2018 年の最多勝右腕だが、2019 年の不整脈が原因で離脱して以降、結局返り咲くことなく 20 代後半で退団というのは本当に悲しい。多和田の離脱も、西武の先発陣がより厳しくなった大きな原因だろう。

1 年経てみれば、20 年の西武のドラフトは良かったと言えるのではないだろうか。特に目を引いたのはドラ 4 の若林、そして育成 5 位の水上である。どちらも後でまた触れるが、若林は怪我さえなければ 50 盗塁、新人王を狙えただろうし、水上も同球団の平良、カープの栗林らに隠れがちだが 29 登板で防御率 2.33 のピッチングは半端じゃない。名前が上がっていない選手も、育成含めしっかりと二軍で試合に出ているし、比較的良い成績を残し理想的な形になっている。西武の未来は明るい！！

(2) シーズン中の投手陣～チーム防御率 3.94(6) 与四球 606(6)

① 先発

先発登板があった主な選手の成績は以下の通りである。(注目すべき成績には下線)

高橋光成	防御率 3.78	27 試合	26 先発	<u>173.2</u> 投球回	<u>11</u> 勝 9 敗
今井達也	3.30	25 試	25 先	<u>158.1</u> 回	8 勝 8 敗
松本航	3.79	28 試	24 先	<u>149.2</u> 回	<u>10</u> 勝 8 敗
平井克典	4.22	25 試	11 先	74.2 回	4 勝 4 敗
ニール	5.85	11 試	11 先	60 回	1 勝 6 敗
渡邊勇太郎	3.44	17 試	9 先	55 回	<u>4</u> 勝 4 敗
浜屋翔太	6.63	8 試	8 先	36.2 回	1 勝 6 敗
與座海人	2.79	15 試	5 先	38.2 回	1 勝 1 敗
上間永遠	6.33	5 試	5 先	21.1 回	1 勝 1 敗

先発はやはり昨季から引き続いて高橋、今井、松本の三本柱体制で、この3人のみ規定投球回到達。チーム内でも頭五つくらい抜けた成績である。今井は問題の制球難が落ち着き、四球は出すが抑えるピッチングで今季飛躍。9/11 のオリックス戦での 142 球 13 奪三振完封 の力投は記憶に新しい。三本柱は素晴らしかったが、両外国人助っ人は戦力になることができず、4 番手以降の先発に苦しんだ印象が強かった。平井は今季から先発転向を試み、開幕初めは防御率 1 点台、3 連勝と安定していたが、徐々に調子を落とし結局中継ぎと流動的な形となり、先発に定着することはできなかった。渡邊、浜屋、與座、上間らは来季以降に期待だが、渡邊が 4 勝をあげたのは大きな収穫だと思う。

②中継ぎ

平良海馬	防御率 <u>0.90</u>	62 試	21H 24HP 20S
ギャレット	3.77	61 試	17H 21HP 2S
武隈祥太	1.76	46 試	9H 9HP 0S
森脇亮介	4.02	45 試	13H 16HP 1S
十亀剣	3.38	40 試	8H 9HP 0S
増田達至	4.99	33 試	9H 9HP 8S
宮川哲	6.57	29 試	6H 7HP 0S
水上由伸	2.33	29 試	4H 4HP 0S

平良は昨年から引き続き圧巻の成績。開幕から無失点投球を続け、7/6 に雨の中の日本ハム戦で高濱にサヨナラタイムリーを許すまで、プロ野球記録となる 39 回連続 の無失点記録を樹立。後半戦は多少失点することはあったものの、シーズン 62 試合投げて 6 失点はもちろん文句なしである。

一方で、平良と共に前年勝利の方程式を形成した森脇、増田は不振に加え途中怪我離脱、シーズン序盤から抑え、勝負所共に平良が起用されることが多かった。ギャレットも試合数は投げてくれてはいるが、5/14, 8/19, 8/24 の試合など ここぞの場面で同点や勝ち越しを許すことが観ていて目立ち、とても安定しているとはいえない内容。19, 20 年と素晴らしかった小川は怪我明け、宮川は奪三振率こそ 10.95 と高いものの、制球や生命線であるパワーカーブの精度に苦しむことが多く、ルーキーイヤー同様の活躍とはならなかった。

こんな中でも対左に無類の強さを誇り ~~オリックス~~ が打てる気がしなかった武隈や、ルーキーながら 17 試合連続無失点の水上らは素晴らしく、田村は後半戦から復帰し防御率 1.31 の好成績。希望は残されているものの、どうしても安定した中継ぎが少なく枚数不足。平良に頼り切った苦しすぎる中継ぎ事情である。

(3) シーズン中の野手陣～打率.239(5) 本塁打 112(4) 盗塁 84(3)

2018 年のチーム打撃成績が打率.273 本塁打 196 盗塁 132 というから、もはや山賊

打線の見る影も無くなってしまっている。シーズン通じて怪我に泣かされ、打率はおろか昔の機動力も失われてしまった。なお、西武は対オリックス戦でローテの都合上山本由伸 8 試合、宮城大弥 6 試合と地獄の日程であり、結果的に 11 勝を 2 人に献上した”週末オリックス地獄“には辻監督も思わず「嫌がらせ」と苦笑いしたほどだった。以降、ポジションごとに今季を振り返る。

①捕手

森友哉 打率.309 125 試合 11 本塁打 41 打点 5 盗塁
柘植世那 .215 35 試 1 本 8 打点 0 盗

森は流石の打撃成績。シーズン中に濃厚接触による離脱もあったが、全体として高いレベルの打撃で前年からの復活を示した。柘植も 9/23 のシーズン終盤にシーズン初のサヨナラとなるタイムリーを放つなど打撃が良い印象だ。

②内野手

呉念庭 打率.238 130 試合 10 本塁打 48 打点 3 盗塁
中村剛也 .284 123 試 18 本 74 打点 0 盗塁
源田壮亮 .272 119 試 2 本 29 打点 24 盗
山川穂高 .232 110 試 24 本 66 打点 0 盗
外崎修汰 .220 73 試 5 本 19 打点 9 盗
スパンジェンバーグ .232 61 試 7 本 27 打点 3 盗

全体としてポジションは若手が流動的、中村は DH かサード、源田はショート、山川はファーストか DH、外崎はセカンドであるが、離脱も多く年間通じての先発出場はできなかった。

外崎が開幕直後に死球で長期離脱し、復帰後も思うようなバッティングとはならなかった。空いたセカンドは主に呉と守備力の高い山田遥楓が守り、呉は内野併用で前半戦こそ 4 割近い驚異的な得点圏打率を誇ったが後半戦は不調。開幕前の期待値、シーズンの貢献度から言えばチーム MVP 級の活躍ではあるのだが、レギュラーで安定するにはもうひと伸びして欲しいところだ。山川も良い時はあるがシーズンを通して調子の波が激しく、得点圏の弱さも目立って復活とは程遠い。源田は持ち前のたまらない守備力に加え流石のアベレージを記録したが、5 月末には新型コロナウイルス感染で離脱し大きな痛手に。続出する離脱者のうちの一人となってしまった。

また健在だったのは中村で、アベレージフォームでの勝負強さや打点を稼ぐ打撃は素晴らしかった。特に満塁時には変わらず打率.667 OPS1.738 と“満塁神”ぶりを発揮し、他球団ファンからすれば満塁で打順が回ってくるとたまったもんじゃなかった。スパンジェンバーグは目立った活躍とはならなかったが、それでも OPS.760 とチーム内ではかなり高い成績で、5/22 にバーヘイゲンから放った逆方向への逆転弾が印象的。2014 年の来日以降強烈なインパクトを残したメヒアは復活とはならず、新型コロナウイルスで来日が遅れたり、家族を連れてこられなかったりした影響も

大きいが、野手でも助っ人外国人は戦力となれなかった。

③外野手

栗山巧	打率.251	117 試合	4 本塁打	43 打点	1 盗塁
金子侑司	.192	101 試合	0 本	9 打点	9 盗塁
岸潤一郎	.220	100 試合	9 本	30 打点	2 盗塁
愛斗	.219	97 試合	8 本	39 打点	1 盗塁
川越誠司	.225	63 試合	5 本	11 打点	1 盗塁
若林楽人	.278	44 試合	2 本	10 打点	20 盗塁

センターは開幕当初は金子、その後主に若林となり離脱後は岸が守備についた。ライトは当初こそ木村だったが大体を愛斗が担い、レフトは岸、若林、栗山と流動的だった。

シーズン通して外野が「枚数はいるが苦しい」状態で、リードオフマンとしてハマりかけていた若林が5/30に守備機会中の大怪我で離脱すると一気に厳しくなり、栗山もシーズン中2000本安打という素晴らしい記録は達成したものの前年ほどの活躍とはならずこれまた離脱もあった。岸や愛斗、川越と若手の台頭は目立つが攻撃力としてはまだイマイチで、これではどうしても打てない外野陣になってしまった。ちなみに、岸は対オリックス戦を.283と得意にしていたり、沢村賞投手である山本由伸相手に本塁打を放ったりとオリックスファンからするとめっちゃくちゃ怖い。

(4)総括

開幕当初は貯金を5まで積み上げたものの、高橋、今井、松本に次ぐ先発4番手以降に苦しみ、中継ぎも昨年築き上げた中継ぎ陣がほとんど崩壊してしまった。前年セーブ王の増田は早々に乱調、森脇は怪我、小川も怪我、宮川も苦しく、ギャレットは不安定。どうしても平良頼みに。水上や武隈、涙の初勝利を挙げた田村など復調の兆しは見えただものの、打線は怪我や離脱が多発し野戦病院状態。その上主軸が不調、助っ人外国人は戦力となれず、西武らしい打撃とは程遠い貧打に。致命的な課題である外野は若林の離脱でより厳しく、結果として打てず守れないまま最下位でシーズンを終えることとなった。来季以降は現在の主力が成績を落とさないままで、4番手以降の先発、そして安定するセットアッパーが確保し、かつ山川・増田が復活、若手外野手が成績を上げる、という余りに難しい目標の達成が必須条件である。

3. 今季の西武ライオンズ

(1)オフ強化とドラフト

外国人助っ人は全員退団で総入れ替え。安定感は無かったものの多く投げ続けていたギャレットがいなくなるのは厳しい中継ぎ陣からするとかなりの痛手である。多

和田や小川はまさかの戦力外となり、上間は育成契約となった。

シーズン中の日ハム交換トレードでは公文、平沼を木村、佐藤と換えて獲得し、公文は中継ぎの大きな戦力である。新外国人は5人で以下の通り。

バーチ・スミス 右投投手

ジャンセン・ウィティ 右打野手 ユーティリティー

ボー・タカハシ 右投投手

ブライアン・オグレディ 左打外野手

ディートリック・エンス 左投投手

ドラフトでは、西武は即戦力左腕としてドラ1で隅田、ドラ2で佐藤の獲得に成功。三本柱は皆右投げで、穴となっている左腕先発を補強できたことは素晴らしい。一方で外野手の獲得はなかったが、ファーム含め枚数は多数いるため問題ではないと思う。

(2)オープン戦

①先発

昨季の三本柱の調整は順調…かと思われたが、21日に今井が右内転筋の張りで登板を回避、他2人は良いが今井は開幕に間に合わなさそう。一方で隅田は3登板防御率1.80、佐藤は最終登板5回無失点含む4登板防御率0.82とかなり上出来。隅田はコントロールが安定、変化球のキレも抜群で、特に左打者の外角へとスライダーは素晴らしい。佐藤もまたコントロールが素晴らしく、テンポが非常に良い。

渡邊も20日に5回を無失点に抑える好投をしているし、助っ人は開幕に間に合わないものの、全体的に見て先発陣は今の所良い仕上がりである。

②中継ぎ

昨季上手いかなかった増田、平井の内容がとても良く、加えて佐々木や田村、與座、大曲、水上が登板している。宮川も復調気味で中継ぎ陣も良さげではあるが、森脇や平良、公文、新外国人のボーらは登板がなく開幕に間に合いそうにない。また、退団したギャレットの穴を埋めることができるかが課題である。

③野手

オープン戦序盤はチーム打率1割台と苦しかったが、終盤になってようやく投打が噛み合ってきている。特に目覚ましいのは外野手・鈴木将平で、ここまで14試合で打率.333、出塁率.424とかなりあたっている。昨年の若林のようにリードオフマンと穴である外野を補填することができるか。森、栗山、中村、源田、外崎ら主軸はまずまずの成績で、特に中村は12試合で打率.406と好調をキープしている。一方で心配されるのは山川で、未だ打率.205と苦しいが、19日には5打数3安打を記録しているから期待は持てる。また、新外国人で唯一開幕へ間に合いそうなのはオグレディで、レフトで出場し打率.308と中々の成績。スパンジェンバーグを越えることができるか。

(3)展望 順位予想：3位

今年の西武は先発陣がかなり充実し、隅田、佐藤のルーキーコンビ次第ではかなり脅威になりうる状況である。今井、高橋、松本で30勝、渡邊、隅田、佐藤で15勝できれば素晴らしい。中継ぎ陣で不安なのは平良や森脇、公文が開幕に間に合いそうに無いところであるが、彼らが復帰し増田、平井がオープン戦通りのピッチングをすることができれば（かなり希望的観測…）、中継ぎが比較的安定し昨年とは異なる守り勝つチームになれるはずである。

また、打線では継続して今までの主軸（源田、森、中村ら）に頼ることにはなるが、鈴木将平、愛斗、岸といった若手外野手中心の機動力野球が成功し、オグレディを筆頭に助っ人陣が機能すれば最高である。ただ、やはり一番のポイントは山川がいつ目覚めるかで、そこにチームの命運がかかっている。山川が安定感を上げ、しっかりと打点を稼ぐバッティングをしてくれれば、西武は一気に勢いを取り戻すだろう。

以下、開幕スタメン・ローテ予想をしておく。（執筆日=3/21）

1中	2左	3捕	4三	5指	6一	7二	8右	9遊		P
鈴木	オグレディ	森	中村	栗山	山川	外崎	愛斗	源田		高橋光成

ローテ：高橋光成-隅田-渡邊(表) 松本-佐藤-與座(裏)

4. おわりに

オリックスファンの考える西武ライオンズの総括/展望を最後まで読んでいただきありがとうございました。メラドはやっぱりいいですね。…あっ、もうベルーナでした。

長々と書きましたが、西武打線には強くあって欲しいのはもちろん、先発の強い西武もまた面白いのでは無いでしょうか。

開幕戦だけはそろそろ勝たせてください。今季の西武ライオンズの躍進を祈っています。

2021 年大谷翔平選手の成績と今季の展望

76 回生 桃鉄

大谷翔平選手は 2021 年、エンゼルスで打っては 46 本塁打で 1 位と 2 本差の 3 位、投げではチーム最多の 9 勝を挙げ、さらにはオールスターゲームにも選出され、見事シーズン MVP を獲得しました。さらには、リアル二刀流やショートタイムは新語流行語大賞にも輝き、まさに日本中が大谷選手の虜となりました。ここでは 2021 年の大谷選手の成績を振り返り、来年の成績の展望なんかをしていきたいと思います。

大谷選手は 2021 年、歴史的なシーズンを送りました。主な成績を振り返ってみます。まずは打撃成績から。

(打率/出塁率/長打率).257/.372/.592 OPS.964 HR46 RBI100 BB%15 K%29.6 SB26 Barrel% 12.2(MLB2 位)

バッティングに関しては、打率こそそれほど高かったわけではありませんでした。本塁打を量産し、リーグ 3 位となる 46 本塁打を放ちました。また、盗塁もチームトップの 26 回と、走塁面でもチームに大きく貢献していたことが分かります。シーズン途中からは大谷以外に打つバッターがおらず、勝負を避けられる場面も目立ちました(トラウトとかレンドンがいたらなあ…。)まあ怪我しない人なんていませんから。今年はこの 2 人も復活することを期待しています。

次に投手成績。

防御率 3.18 9 勝 2 敗 130.1IP 156SO 44BB

4S Avg 95.6mph (2020 は 93.8mph)

K%29.3 BB%8.3

ピッチングに関しては、2 桁勝利には届きませんでした。チームトップの 9 勝をあげ(チームトップで 9 勝って…)、130.1 イニングで 156 三振と 1 イニング平均奪三振が 1 を超える成績をあげました。フォーシームの球速も前年に比べ 1 マイル以上速くなり、投手としても大きく成長した 1 年となりました。

さてここからは、2022 年の成績の展望をしていこうと思います。

2022 年 4 月 17 日現在、主な打撃成績は.231/.250/.513 OPS .763 HR3 となっています。開幕後しばらくは当たりのない状態でしたが、4/16 に 2 本のホームランを放ち、17 日にもホームランを放ったので徐々に調子が上向いているように感じます。僕個人的には去年の成績はさすがに出来過ぎだと思っているので、去年ほどの成績は残せないと思っています。対戦相手の球団もただやられているだけというわけでもなく、情報も集まってきているでしょうし、ホームランは 33 本ぐらいで予想しようと思いますが、昨年同様の活躍を見せて次こそはホームラン王になることを期待しています。

次に投手成績、現在の成績は 0 勝 2 敗 防御率 7.56 8.1IP 14SO となっています。2 戦目

のレンジャーズ戦こそ炎上してしまいましたが、開幕戦のアストロズ戦では5回途中1失点と粘りの投球を見せました。アストロズ打線相手に1失点は十分いい成績に思います。これも踏まえて、2022年は8勝、防御率3.5程度と予想したいと思いますが、2桁勝利にも期待したいと思います。

と、こんな感じで雑過ぎる考察を書いてみました。2021年の活躍はまさにベーブルースのような活躍ぶりで野球界全体に大きなインパクトを与えたと思います。今年も去年に引き続き大活躍することを願っています。

トレード成功球団はどこ？

76 回生 hamfan

1. はじめに

プロ野球では、時折「トレード」が行われ、その中でも交換トレードでは、球団間で選手同士での交換が行われます。そこではもちろん、獲得した選手が大活躍したり、逆に放出した選手の方が大活躍したりといったことが起こるわけですが、過去のトレードを見たときに最もトレードに「成功している」といえる球団はどこなのか、現在の 12 球団による構成となった 2005 年からの全トレード（金銭の絡むトレードや無償トレードは除く）の総勢 282 人を調べてみました。以下、敬称は基本省略していますのでご了承ください。

2. 計算方法

まず、野手指標 FI は、

$$FI = (\text{単打}) \times 2 + (\text{二塁打}) \times 3 + (\text{三塁打}) \times 4 + (\text{本塁打}) \times 5 + (\text{四死球}) + (\text{盗塁}) - (\text{盗塁失敗}) \times 2 + (\text{犠打飛}) \times 0.5$$

で算出します。係数は OPS のものを大体意識しました。

例えば 2021 年の村上宗隆の成績だと、

$$FI = 73 \times 2 + 27 \times 3 + 39 \times 5 + 112 + 12 - 7 \times 2 + 3 \times 0.5 = 533.5$$

となります。

次に、投手指標 PI は、

$$PI = (\text{勝利}) \times 10 + (\text{セーブ}) \times 10 + (\text{ホールド}) \times 10 + (\text{投球回}) \times 3$$

で算出します。分かる人は分かると思いますが、小松式ドネーションの応用ですね。

例えば 2021 年の山本由伸の成績だと、

$$PI = 18 \times 10 + 193.7 \times 3 = 1360$$

となります。

最後に、この 2 つをもとにした野手投手共通の指標を設定する必要があります。ここでは、この企画で集計した選手の FI、PI の平均をそれぞれ 1000 点として、それに比例するように各選手の成績をポイント化しています。

3. 各トレード編

ここでは、それぞれのトレードについて、様々な角度からランキング化しました。

①大型トレードランキング

そのトレードで移籍した全選手のポイントの合計が高い順のランキングです。

1位：19352点 糸井・八木（日ハム）⇄大引・木佐貫・赤田（オリックス）

1位はなんといってもこれ。2013年1月に世間を騒がせた、糸井を中心とした超大型トレードです。糸井が1人で11741点を獲得すると共に、この後日ハム・ヤクルトで活躍した大引も5120点を獲得、2位に差をつけてこの順位となりました。

2位：16580点 橋本・押本・川島（日ハム）⇄藤井・坂本・三木（ヤクルト）

2位に入ったのは、2008年1月に行われたこのトレード。ヤクルトへ移籍した川島（後にソフトバンク）・押本の2人が共に5000点以上を獲得し、日ハムに移籍した藤井も4000点を獲得したことによりこの順位に入りました。先の糸井ほど大物と言われていた選手はいないながらも、移籍した後長い期間活躍した選手が多いことも高ポイントの一因になりました。

3位：15241点 多村（横浜）⇄寺原（ソフトバンク）

1対1のトレードながらこの順位に食い込んだのが、2006年12月5日に行われたこのトレードです。お互いビッグネーム同士の超大型トレードで、多村が6761点、寺原が8280点と共に高ポイントを獲得しました。

4位：10903点 阿部・平野（オリックス）⇄吉野・濱中（阪神）

4位に入ったのは、2007年11月26日に行われたこのトレード。このトレードで阪神へ移籍した平野はこの後二塁手のレギュラーに定着し、7821点を獲得する活躍を見せました。

5位：10903点 公文・大田（巨人）⇄吉川・石川（日ハム）

5位に入ったのは、2016年11月2日に行われたこのトレードです。この選手たちの中で活躍したのはなんといっても大田で、日ハムに移籍してから右翼手のレギュラーに定着、5325点を獲得しました。また、公文も2376点を獲得し、日ハムから見れば成功と言えるトレードとなりました。

②成功トレードランキング

そのトレードで、獲得した選手と放出した選手のポイント差が大きいトレードのランキングです。

1位：8748点 久保（ロッテ）⇄橋本（阪神）

1位となったのは、2009年3月14日に行われたこのトレードです。阪神に移籍した久保は主に先発として大活躍、後には横浜へFA移籍する等、最終的には8944点を獲得しました。一步の橋本は目立った活躍は見せられず、これほどの差が付くことになりました。

2位：6751点 阿部・平野（オリックス）⇄吉野・濱中（阪神）

2位に入ったのは、前のランキングでも4位に入ったこのトレード。やはり平野の活躍が大きく働きました。

3位：5573点 糸井・八木（日ハム）⇄大引・木佐貫・赤田（オリックス）

3位に入ったのは、前のランキングでは1位だったこのトレードでした。やはり糸井のポイントは大きかったですが、大引を筆頭に日ハムに移籍した選手も十分な成績を残したため、ポイント差はそこまで大きくはなりませんでした。

4位：5379点 公文・大田（巨人）⇄吉川・石川（日ハム）

4位に入ったのは、前のランキングでは5位だったこのトレード。やはり大田・公文の2人が大きくポイントを獲得しました。

5位：5264点 藤田（横浜）⇄内村（楽天）

5位に食い込んだのは、2012年6月14日に行われたこのトレードです。このトレードで楽天に移籍した藤田は二塁手のレギュラーを掴み、6361点を獲得しました。内村も1097点と平均以上の活躍は見せましたが、藤田の活躍が大きくこの順位となりました。

2. 各球団編

ここでは、各球団のトレードについてランキング化しました。

①トレード獲得数ランキング

1位：41人 オリックス

2位：40人 日ハム

3位：32人 巨人

4位：29人 横浜

5位：23人 楽天

6位：21人 阪神

7位：19人 ソフトバンク

8位：18人 ロッテ

9位：17人 ヤクルト

10位：16人 広島

11位：16人 西武

12位：10人 中日

1位、2位にはオリックス、日ハムがそれぞれ入り、3位以下とは大きな差を付けました。この2チーム、特に日本ハムは積極的にトレードを行うチームの印象がありますよね。逆に12位となったのは中日でした。中日は今年の立浪新監督の発言にも

あったように、活発にトレードを行うチームではなく、おおむね印象通りと言えるかもしれません。

②トレード獲得ポイントランキング

- 1位：44811点 日ハム
- 2位：44002点 オリックス
- 3位：35539点 横浜
- 4位：29121点 阪神
- 5位：28273点 巨人
- 6位：23282点 ヤクルト
- 7位：18324点 西武
- 8位：17938点 楽天
- 9位：15439点 ソフトバンク
- 10位：12677点 広島
- 11位：7866点 ロッテ
- 12位：4727点 中日

前のランキングとは1位と2位が入れ替わり、1位が日ハム、2位がオリックスとなりました。日ハムは大田・公文を筆頭に、獲得人数の多さと個々のポイントの高さにより多くのポイントを獲得しました。オリックスは獲得人数の多さに加えて、糸井が1人で10000点以上を獲得したことも影響しました。また、12位は前のランキングと同様中日となりました。

③トレード利益ポイントランキング

トレード獲得点数からトレード放出点数を引いた数値でランキング化しました。

- 1位：15594点：阪神
- 2位：9534点：西武
- 3位：7830点：ヤクルト
- 4位：7256点：楽天
- 5位：-1769点：オリックス
- 6位：-4717点：中日
- 7位：-4220点：日ハム
- 8位：-4780点：広島
- 9位：-4912点：ソフトバンク
- 10位：-6190点：巨人
- 11位：-6525点：横浜
- 12位：-7102点：ロッテ

前のランキングと異なり、1位が阪神となりました。4位と比較的高い獲得点数に加えて、放出点数を13527点と低く抑えたことがその理由でしょう。また12位となったロッテは、獲得点数が7866点と低かったのが影響しました。前のランキングで1位だった日ハムは、糸井、川島の放出などが響き7位となりました。

4. おわりに

ここまで、過去のトレードを点数化して見てきましたが、いかがでしたでしょうか。この記事はあくまで1つの見方でありこれが絶対ではありませんが、数値化してみるとによって様々なものが見えてきたと思います。ちなみに筆者は日ハムファンなのですが、最後のランキングで思いのほか順位が低くて悲しんでいます。

最後に、今回集計、使用したデータをインターネットに上げておいたので、以下にURLとQRコードを載せておきます。良ければ見ていただけると嬉しいです。



<https://bit.ly/3L3hzuc>

大谷翔平だけじゃない！打撃もできる投手特集

76 回生 キンメタ

1. はじめに

こんにちは。高校2年生のキンメタです。みなさんは大谷翔平選手を知っていますか？大谷選手は昨年 MLB で投手としても野手としても大活躍したので、みなさんもよくご存知でしょう。投手としては9勝2敗、防御率は3.18で奪三振数は156、野手としては打率.257で46本塁打という、投打ともに圧巻の活躍で見事ア・リーグのMVPに輝きました。さて、そのような圧倒的な活躍をしている大谷選手ですが、NPBでも投手として素晴らしい打撃をした選手がいます。今回はその選手たちを紹介していこうと思います。

2. 今季の投手成績

まずは2022年シーズンのこれまでの投手の打撃成績を見ていきましょう。

順位	選手名	球団	打率	安打	本塁打	打点	出塁率	OPS
1	山崎伊織	巨人	1	1	0	1	1	2
1	岡野祐一郎	中日	1	1	0	2	1	2
3	森下暢仁	広島	0.4	4	0	7	0.4	1.1
3	福谷浩司	中日	0.4	2	0	0	0.4	0.8
5	勝野昌慶	中日	0.333	2	1	2	0.333	1.333
5	大野雄大	中日	0.333	2	0	0	0.333	0.667
5	石田健大	DeNA	0.333	1	0	1	0.333	0.667
5	石川雅規	ヤクルト	0.333	1	0	0	0.333	0.667
5	坂本祐也	DeNA	0.333	1	0	0	0.333	0.667
10	高橋奎二	ヤクルト	0.25	2	0	0	0.333	0.583
10	戸郷翔征	巨人	0.25	2	0	3	0.25	0.5
10	伊藤将司	阪神	0.25	1	0	1	0.25	0.5
10	高橋宏斗	中日	0.25	1	0	2	0.25	0.5
14	大瀬良大地	広島	0.222	2	0	1	0.222	0.444
15	上茶谷大河	DeNA	0.2	1	0	0	0.2	0.4
15	メルセデス	巨人	0.2	1	0	0	0.2	0.6
15	原樹里	ヤクルト	0.2	1	0	0	0.2	0.4
18	柳裕也	中日	0.125	1	0	0	0.125	0.25

(4/17 までの成績。打率 0 割はカット。枠の関係で色々とカットしました)

今年はホームランを打った投手もいれば 7 打点 (リーグトップは 13) をあげている投手もいるので、なかなか珍しい年ですね。特筆する選手を挙げるならやはり森下投手でしょう。10 打数の 4 安打で 7 打点と素晴らしい活躍をしています。今年の広島は面白そうです。球団で言うと中日の投手陣が打ち始めている気がします。中村紀洋氏の指導の賜物でしょうか?

3. 歴代の「打てる」投手

ここからは歴代の選手を見ていこうと思います。ここでは僕の独断と偏見で選んだ 3 名の選手を紹介します。

(1) 金田正一選手

通算 400 勝 4490 奪三振の言わずと知れた名投手ですが、金田選手は打撃でも投手登板時に 36 本、代打として 2 本と通算 38 本もの本塁打を打っており、大谷翔平選手を除いて投手の中で一番本塁打を打っている選手です。投手なのに通算 8 敬遠となかなか面白いですね。

選手名	試合	打席	打数	打率	安打	本塁打	打点
金田正一 (通算)	1053	2233	2054	0.198	406	38	177
キャリアハイ (1953)	50	128	120	0.275	33	3	11

(2) 別所毅彦選手

310 勝をあげ、シーズン完投 47 回の日本記録を持つ名投手です。南海と巨人で活躍した別所選手ですが、打撃成績が普通の野球選手と同じかそれ以上の通算成績を誇っています。通算打率.250 越えはすごいですよね。

選手名	試合	打席	打数	打率	安打	本塁打	打点
別所毅彦 (通算)	828	2111	1972	0.254	500	35	248
キャリアハイ (1950)	67	161	151	0.344	52	4	28

(3) 桑田真澄選手

これまた言わずと知れた巨人の名投手ですね (お前何回巨人の選手出すねん)。高校時代から野手としても優れており、入団時は野手転向を進める人たちもいましたが投手として大活躍しました。通算打率.216 は 1951 年以降にプロ入りした投手の中で一番です。

選手名	試合	打席	打数	打率	安打	本塁打	打点
桑田真澄 (通算)	478	1049	890	0.216	192	7	79

注.キャリアハイは独断と偏見で選びました。ご容赦ください。

4. 最後に

今回紹介した3選手以外にも、スタルヒン、稲尾和久、杉下茂選手などが有名な打でも活躍した投手でしょうか。以外にまとめてみると8番バッターを敬遠して勝負するのを躊躇われる選手がなかなかの数いたことが驚きです。また、やはり大谷翔平選手は規格外ですね。

色々とカットしたり抜けている部分があるかもしれませんがそこは多めに見てください。ではここら辺で失礼します。

以下投手の打撃写真



戦争直後のプロ野球のエースたち

75 回生 A.M.

はじめまして。75 回の A.M.です。南大阪生え抜きの南海残党系 SB ファンです。幻の存在ではないんですね、これが。初参戦で記事を書くとかいうおこがましいことをしているのですが許してほしいです。

この記事の趣旨は戦後の投手たちの紹介です。この記事で書くのは 1960 年ぐらいまでです。それ以降の投手はプ〇〇ピ A の OB など結構知られていますから。ただ、名前とか成績とかだけを乗せていくだけでは面白くないので、より有益な記事になるように野球界の時代背景とか現代野球のスタッツにおける分析とかもほどほどに入れていきたいと思っています。著者の主観も多分に含まれていますがそこは**大人の判断**をお願いします。

まず、戦前野球の投手を少しだけ。プロ野球は 1936 年に始まります。1930 年代には言わずと知れた巨人軍の沢村栄治投手（1934～1937、1940～1941、1943、63 勝 22 敗）やスタルヒン投手（1934～1955、303 勝 176 敗）、タイガースの御園生崇男投手（1936～1951、127 勝 70 敗）、若林忠志投手などがいました。1940 年代になると西鉄軍などで活躍した野口二郎投手や朝日軍の林安夫投手、阪急軍の森弘太郎投手、南海の神田武夫投手、そして巨人軍の藤本英雄投手なども登場しました。また、スタルヒン投手や若林投手も引き続き活躍していました。しかし、このころから戦争も佳境に入り、健康な男性である職業野球選手は徴兵され、徐々にスタルヒン投手や若林投手、藤本投手などの日本国籍を持たない選手を除いた投手が減っていったようです。

このころのプロ野球全体の傾向として、①少ない三振、②多い四死球、③低 BABIP があげられます（内野安打を考えないと）。発展途上な野球的な傾向で、現在に比べ、特に投手のコントロールと打者のスイングの強さは低かったように考えられます。この中で野口投手は K/BB などの指標が優れており、現代的な観点の好投手ということになるでしょうか。また、沢村投手は不正確ですがセイバー評価が高そうなスタッツをしています。

さて、1945 年は戦火によってシーズンが中止となり、1946 年からプロ野球が再開しますが、選手の顔ぶれは結構変わっています。戦後すぐは上記のスタルヒン投手（戦後は技巧派に転じていたとされます）やスライダーで有名な藤本投手、七色の変化球の若林投手、御園生投手、また巨人の中尾碩志投手が球界の中心だったわけです。また、戦地から帰還した選手たちも加わっていきました。で、ここから面倒だったのでとりあえず 100 勝投手を達成年順に並べたのが以下の表です（以下敬称略）。

1939 スタルヒン

1942 若林忠志、野口二郎、

1947 御園生崇男
1948 中尾碩志、森弘太郎、藤本英雄
1949 別所毅彦
1950 真田重蔵、天保義夫、川崎徳次
1952 服部受弘、梶岡忠義
1953 清水秀雄、杉下茂、藤村隆男、柚木進
1954 金田正一
1955 大友工、米川泰夫、長谷川良平、荒巻淳
1958 梶本隆夫
1959 河村英文、稲尾和久、備前喜夫
1960 小山正明、武智文雄、秋山登、渡辺省三
1961 小野正一、杉浦忠、米田哲也
1962 土橋正幸、皆川睦男、藤田元司

次の達成が1964年の村山実投手です。この時代の投手は1年で20勝ぐらい普通にするので、1930～1950年代の投手たり得るのはここまででしょう。次に200勝です。

1946 スタルヒン 1947 若林忠志 1948 野口二郎 1954 別所毅彦
1955 中尾碩志、藤本英雄 1957 杉下茂 1958 金田正一 1962 稲尾和久
1964 小山正明 1966 米田哲也 1967 梶本隆夫 1968 皆川睦男

100勝の表に出ていた投手だけです。また、100勝の表の中で150勝以上200勝未満は真田、川崎、長谷川、荒巻、秋山、小野、杉浦、土橋各投手です。

主な投手の名前を覚えてもらった（）ところで、この時代の分析をしていきましょう。まず、戦時中は異常な打低でした。原因は簡単で、物資不足による粗悪なボールですね。その後、終戦～1950くらいまではこちらも異常な打高となっています。川上哲治選手や大下弘選手、藤村富美男選手や小鶴誠選手の活躍に象徴される時代です。そして、それ以降は1970年代までまた打低の時代となっていくわけです。

ここで言いたいこととしては、防御率は時代間比較の指標には絶対にならないということですね。例えば藤本英雄投手は通算防御率1.90ですが、戦時中の活躍と、戦後ラビットボール期の活躍では防御率が1点以上違います。では勝利数はどうかというと、こっちも微妙で、現在でも打力によって左右されるといわれる勝利数ですが、このころはドラフトもなく、今よりもっとチーム力の差があったわけです。勝率7割台とかよくあります。というわけで、そこら辺を差し引いて特にすごいと思われる投手を取り上げていきましょう。

まずは国鉄～巨人の**金田正一**投手です。今回取り上げる時代からははみ出しますが、取り上げないことはできないでしょう。議論の余地なくNPB歴代最強投手であり、指標などもその意見を支持しています。沢村賞3回ですが、実際には5、6回は獲得していても

おかしくないシーズンがあります。圧倒的なイニング数だけに良くないほうの通算記録などもありますが、それを吹き飛ばす圧倒的な成績です。400勝でも国鉄時代は援護不足気味なぐらいなので、さすがとしか言いようがないですね。

次に、南海～巨人の**別所毅彦**投手です。戦前から2リーグ分裂後まで投げた選手ですね。この投手も沢村賞2回ですが、もっと受賞していてもおかしくはなかったでしょう。特に1952年は沢村賞を受賞こそしていないもののMVPとなっており、スタッツにおいて沢村賞のシーズンと比較してもベストシーズンと言っていいと思うような成績です。

その1952年の沢村賞を受賞しているのが中日～大毎の**杉下茂**投手です。フォークの神様として知られていますね。1954年シーズンの成績はこれまで紹介してきた投手の送ってきたシーズンとも水をあけるような、異次元のスタッツになっています。2リーグ時代に400イニング近く投げて防御率1点台前半とはいったいどうなっているのでしょうか。

ちょっと有名どころからは離れますが、巨人～近鉄の**大友工**投手は通算では130勝ですが、1953年（沢村賞のシーズン）から1955年までの成績はリーグのエースクラスとなっています。サイドスローからの圧倒的な速球が特徴だったようです。別所、中尾投手らのインパクトで影が薄い気がしますが。

次に広島の**長谷川良平**投手です。長谷川投手は小さな大投手として知られ、様々な角度、球種で打者を翻弄しました。弱小広島で197勝を積み上げ、特に1954、1955年シーズンの成績は特筆に値するのですが、それぞれ別所投手、杉下投手に阻まれています。

以上が1940後半～50年代にかけて圧倒的な活躍だった投手たちです。ここで1つ問題があって、球団が偏りすぎです。自由競争だったので致し方ないのですが。年代の区切りの問題で省かせていただいたのは西鉄の**稲尾和久**投手です。1950年代終盤に登場し、シュートとスライダーの圧倒的な投球で鳴りました。ただ1960年代も相当投げているのでどういう扱いにするか悩みますね。また、この時代にはこういった明らかにヤヴァイ成績を残した大投手以外にも、長年イニングを投げまくった各球団のレジェンドがいることも忘れてはいけません。松竹などの真田重蔵投手、阪神（大阪）の梶岡投手、藤村隆男投手、大洋などの秋山投手、南海の柚木投手、阪急の服部投手、毎日の荒巻投手、東急、東映の米川投手、近鉄の武智投手、西鉄の河村投手などは各球団の1950年代のエースでしょう。

まとめに入ると、1950年代の投手は王・長嶋時代より前で、一般的に全く知られていないような部分も多いです。そんな終戦～1950年代のプロ野球を知ってほしいという願いからこの記事を書きました。これは間違いなくミスチョイスで、絶対この時代の成績がやたら派手な野手でやるべきでした。この時代をリアルでご存じの方、たぶんいらっしゃらないでしょうけれど、是非詳しく教えてください。

近年は打低傾向が強まっています（特にパ）。明らかに投手のレベルが上がりすぎだと

思います。それを野手が追い越しているメジャーリーグが異常で、NPB はむしろ正常でしょう。打低になるとやたらと野手のレベル低下を叫ぶ人がいますが、これはおかしいと思います。最近、投手の配球とかはデータ解析などで無茶苦茶進化していますが、打者って私たち素人目に進化がわからないですからね。しかし、いろんな人が言う野球の面白さやセオリーって、1910 年代のメジャーや日本では戦前などの異常な打低時代のものが多いので、そういうのが生きてくるんじゃないかと思いますね。いつか何らかの理由で打高に戻ると思うので、気長に待てばいいと思います。

最後に。最初にも触れたように OB の知名度って某スマホゲームに左右されている気がします。ここで、上の表の選手でカードが出ているのは、金田投手、杉浦投手、稲尾投手のみです。この時代の投手は球種が少ないので出しにくいのはわかりますが、是非とも出してほしいです。おススメは荒巻投手です。左の速球派で、カーブとチェンジアップもあります。何より同じ投手が出まくるロッテ枠です（先に成田文男投手とかだろといわれても反論できませんが）。ただ、そんなことより先に米田投手を出すべきです。金田投手を出したなら、双璧の米田投手は絶対に必要でしょう。~~結局言いたいのは、昔からのファンに怒られるかもしれませんが、近鉄選手を楽天枠に移せば、オリックス純正のガチ勢以外はみんなハッピーでしょう。近鉄選手そんなに出ないし。~~

あなたが一番好きな OB 選手は誰ですか？自分の推し球団の歴史知識を深めれば、もっと好きになれるかもですよ。

オースティン・アダムス投手の 2019 年

高校 3 年 Marble

※当記事は一部カラー画像を使用しています。必要に応じてオンライン版もご覧ください。

1. はじめに

100 年ぶりの 2-Way プレイヤーとしてチームの先発ローテーションの核を担いながらホームラン王まであと 2 本に迫るなど、野球界を席巻した大谷翔平選手が大きな話題を呼んだ 2021 年のメジャーリーグ。華やかな記録たちの裏で、とあるワースト記録がマークされていた。制球の難易度が飛躍的に下がったとされるライブボール時代の始まりである 1920 年以降の、死球の新記録である。更新前は 1922 年にデトロイトタイガースのハワード・アムーキーが 279 イニングでマークした 23 であったが、アダムスはリリーフとしてわずか 48 イニングでこれを更新した。本稿ではアダムスの選手としての特徴や死球となる球の共通点を探した結果を記す。

なお、本稿で使用したデータは MLB Advanced Media 社が提供しているウェブサイトである baseball savant 及び FanGraphs 社のウェブサイトである FanGraphs から引用している。また、分析には統計解析言語 R を用いている。

2. 2019 年

アダムスがメジャーで最初にまとまった数登板したのは 2019 年のシーズン、ナショナルズから DFA¹となりマリナーズに移籍してからである。30 イニング以上を投げた投手の中ではメジャー 2 位となる三振率²を記録した。この時の投球の特徴についてまとめる。

まず球種構成についてである。前年まで 4 割程度だったスライダーの投球割合が増加し、6 割となった。下の表に両チームの中継ぎ投手の投球傾向について示す。

球団名	速球の投球割合	速球の得点価値	変化球の得点価値
マリナーズ	49.1%	-26.0	33.5
ナショナルズ	58.9%	-43.7	14.4

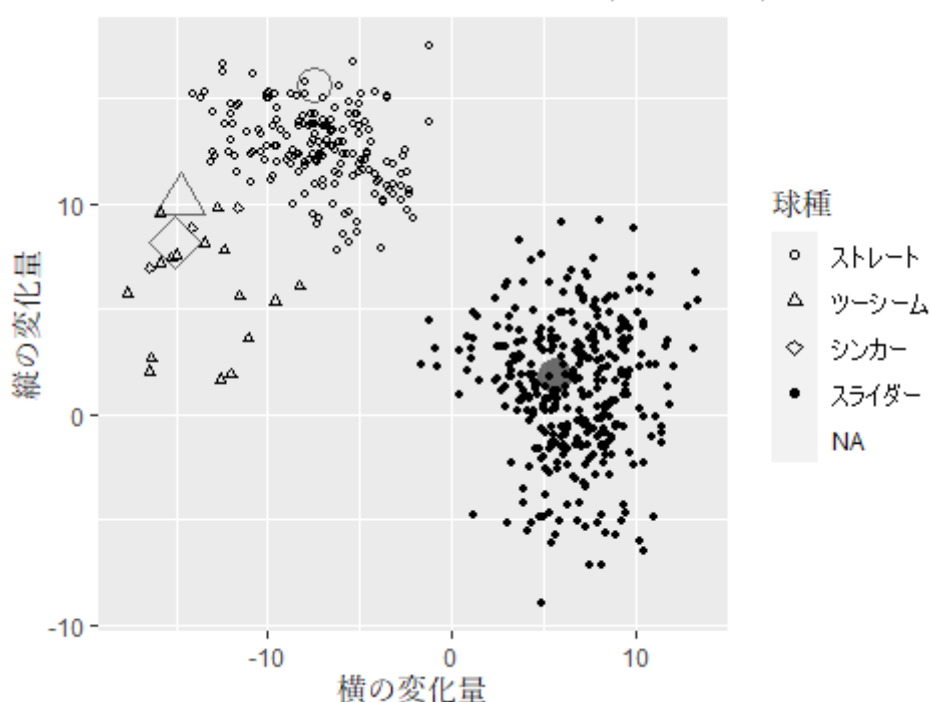
¹ 選手をメジャーの 40 人ロスターから外す措置。これを受けた選手は数日中にトレード、マイナー降格、または放出される。

² ここでは対戦打者数に占める三振の割合のこと。「奪三振率」と言った場合は 9 イニングあたりの奪三振を表す場合が多い。

この年のナショナルズのチームとしての速球の投球割合はメジャー 5 位、マリナーズは 24 位（下から 7 番目）であった。ではナショナルズのブルペンには速球を有効に使う投手が多かったのかというそのようなことはなく、FanGraphs の算出したピッチバリュー³ では全体 30 チーム中 29 位、100 球あたりでは 28 位となっている。マリナーズは全体 20 位、100 球あたりでは 21 位であるが、速球の投球割合を最小限に抑えることによって被害の抑制が図られているのではないかと推察される。

次に、2019 年のアダムの各球の変化量を示す。なお、図中の大きい点は各球種のメジャーリーグにおける右投手の平均変化量である。

2019年のアダムの投球の変化量（捕手視点）

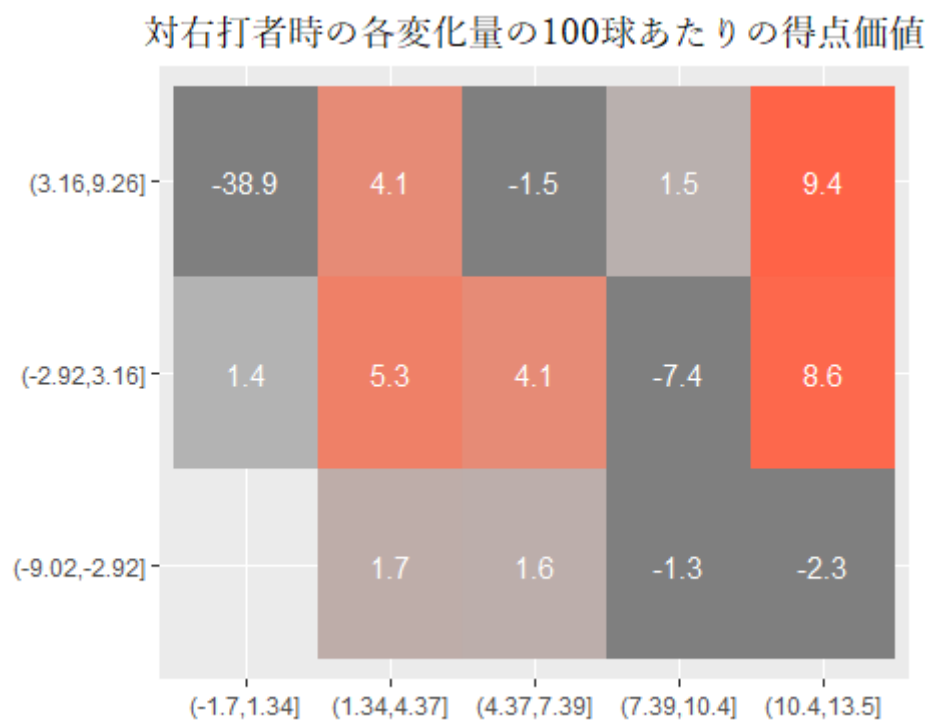
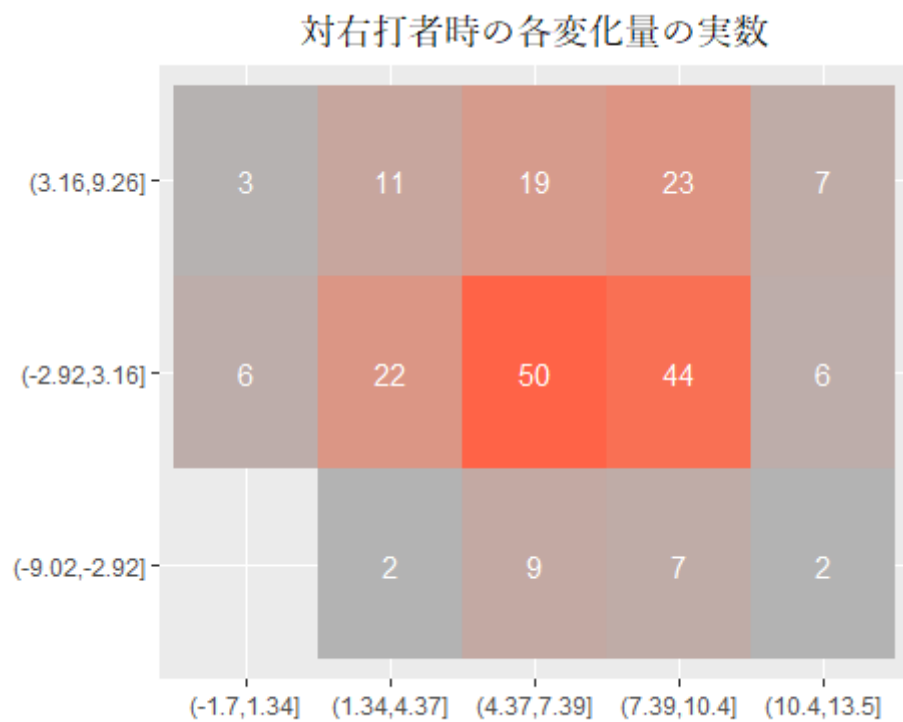


各球種とも散らばりが見られるが、スライダーは概ね平均的である。しかし回転数は Baseball Savant によれば 500 球以上を投じた選手の中で 21 位となっており、やや曲がり始めが遅いなどの平均的なスライダーとは異なる変化をする可能性がある。またアダムスはスリークォーターのような低めの角度で腕を振る投手であるため、速球は平均より少ないホップ量となっている。一般に速球のホップ量が多いほどフライが、少ないほどゴロが増えるとされている。この年のアダムスも例外ではなく、MLB 全体より 5 % 程度高い 50% のゴロ率を記録した。

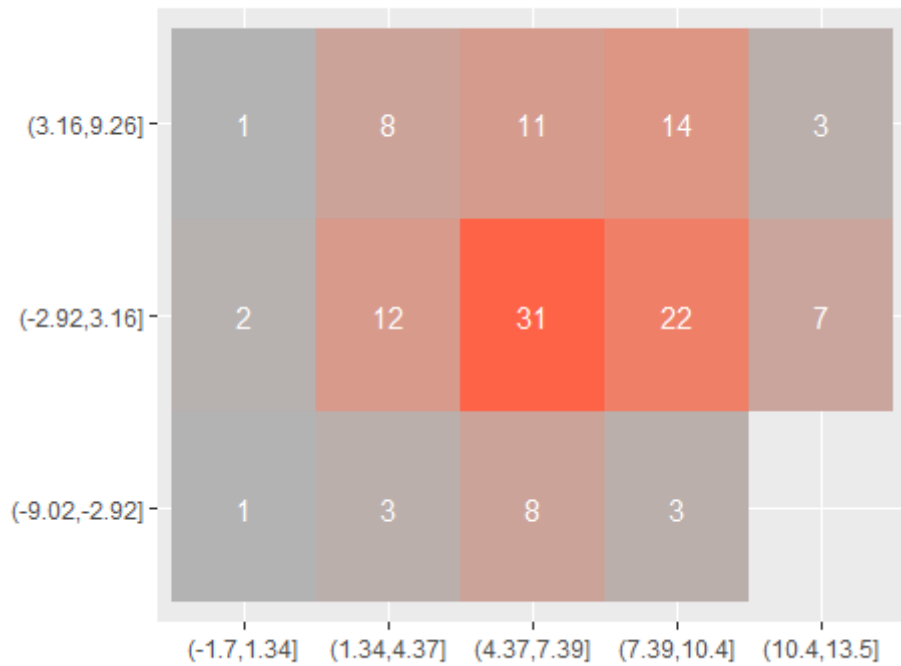
どのようなスライダーが有効であるかを検証するため、以下のヒートマップを作成し

³ その球種の平均よりどれくらいの失点を抑止したかを示す指標。ここでは、数値が高いほど良い。

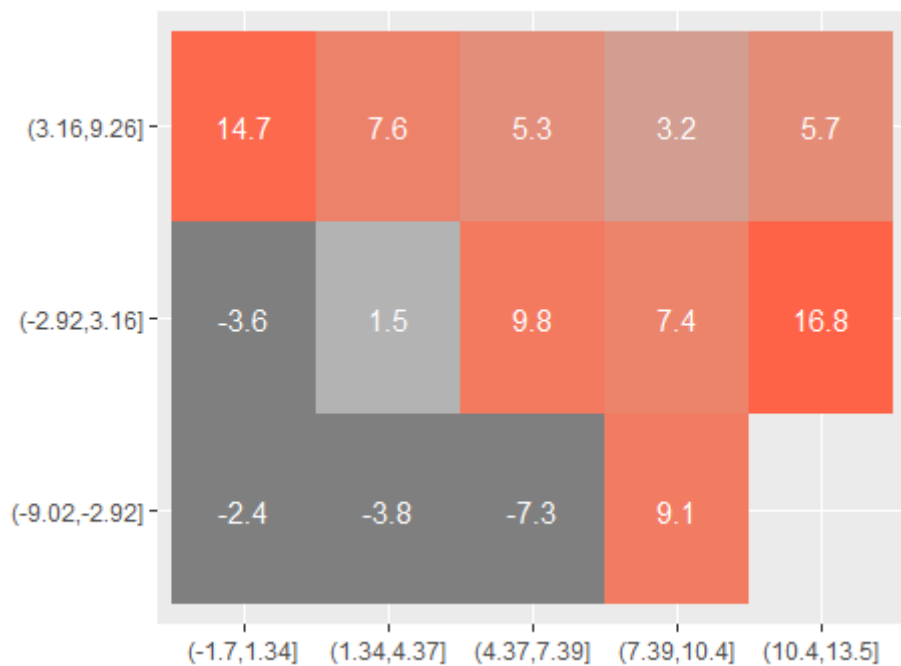
た。2つ目で使用した指標は RV/100 であり、これを用いるにはサンプル数が過少である可能性があるが、筆者は空振り率や被打球の質などの他の指標は本稿で用いるには不適當、もしくは必要な図が多くなりすぎると判断し、このような形とした。



対左打者時の各変化量の実数

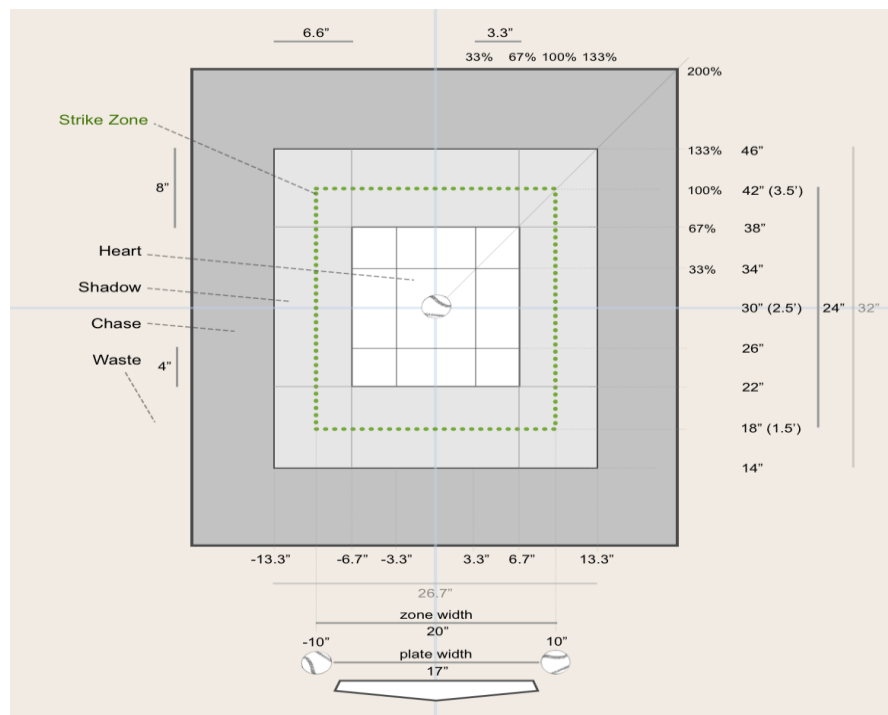


対左打者時の各変化量の100球あたりの得点価値

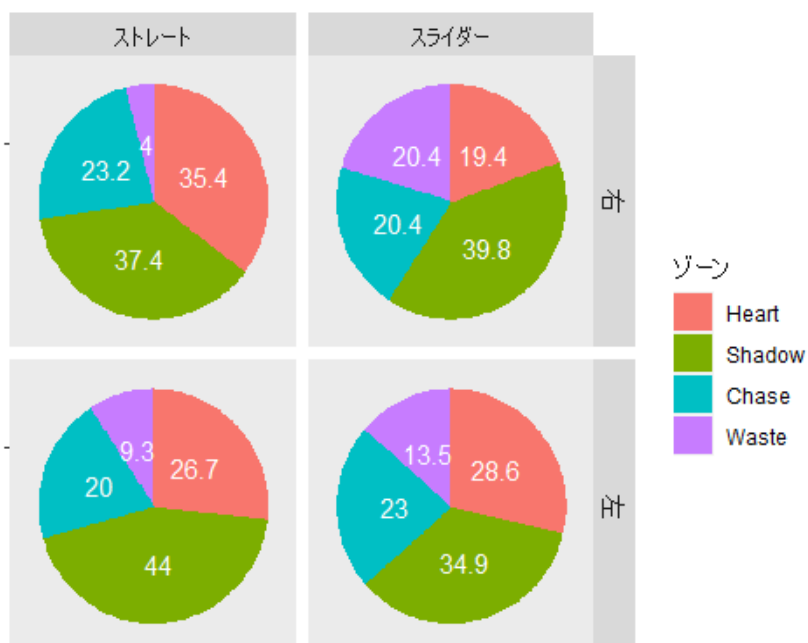


以上より、アダムスは打者の左右によってスライダーを変えていないこと、右打者に対しては曲がりの大きすぎないスライダーが有効である可能性があること、左打者には横変化が大きいものが有効であり、小さいものは失点増加の要因となっている可能性があることがわかる。次に、アダムスがどのようなゾーンに投球したかを示す。投球ゾーンは、

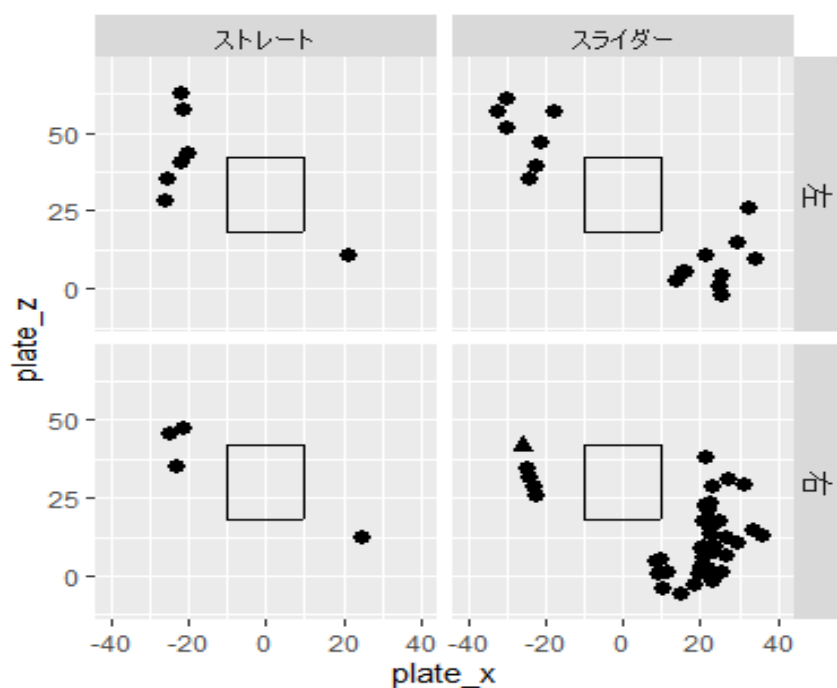
ストライクゾーンの真ん中寄りを指す Heart、ストライクゾーンとボールゾーンの境目周辺を指す Shadow、ボールゾーンのうち配球の一部として用いられる Chase、意味のない完全に外れたボールゾーンである Waste に分けられる。投手は Shadow に投げるべきとされる一方、Chase のスイング率は打者の選球眼を示す指標として用いられる。なお、それぞれの詳細な定義については以下の画像（Tom Tango 氏のウェブサイトより引用）に示した。



以下に 2019 年のアダムスの対戦打者の打席と球種ごとのゾーン別投球割合を示す。



この年のリーグ平均は Heart が 25%、Shadow が 43%、Chase が 23%、Waste が 9% であり、それと比較するとアダムスは真ん中寄りに入るボール及び明らかなボールのスライダーは多く、Shadow の投球割合は少し低い。詳細は 21 年との比較の章に記す。次に、Waste の球が具体的にどこに投げられたかを示す。画像は捕手視点のものであり、左側に右打席が、右側に左打席がある。枠線はストライクゾーンである。



上の画像において、一つだけ三角形で示した球が死球となった球である。この球はアダムスがまだナショナルズに所属していた4月20日のマーリンズ戦で、ホルヘ・アルファロ選手（現パドレス）に投じたものだ。次にこの球について詳しく見ていく。以下の表で「平均」はこの年のアダムスのスライダーの平均を、「Waste」はこの年のWasteに投げられたアダムスのスライダーのうち、投手の腕側に投げられたものの平均、「死球」はアダムスのこの年の死球を指す。

種類	球種	球速 (mph)	水平リリース位置	リリース高さ	回転数	前後リリース位置	横変 化量	縦変 化量
死球	Slider	88.60	-3.71	5.52	2644.00	5.40	3.48	5.04
Waste	Slider	88.75	-3.65	5.48	2746.18	5.01	5.66	1.05
平均	Slider	89.40	-3.59	5.41	2828.60	5.15	6.56	1.27

表のとおり、右側に投じたWaste、特に死球となったものはリリース位置が体から大きく離れている。普段と異なる位置、特に体から離れたところではコントロールが利きにくくなる可能性が考えられる。今回は執筆時間の都合で詳しくは検証できないので、これは今後の課題としたい。また、死球となった球は横変化が小さく縦変化の数字（上向きにホップする量）が大きく、回転数も通常より1分あたり200近く下がっており、リリースの感覚がずれた、もしくはボールが滑ったと考えるのが妥当ではないだろうか。

3. おわりに

現代でも、「投球の基本は速球である」という価値観は野球界に根強くあるが、これは必ずしも正しいとは限らない。アダムスはスライダーを増やして成功した。彼のスライダーは得点価値分布から見てもやや特殊であると考えられ、この特殊性は大きな武器となる。今後、メジャーリーグでアダムスにとっての制球力や速球の質のような欠点を抱えていても活躍できる投手の更なる登場が望まれる。

※当記事は時間的・技術的制約により短縮されています。続きは追って公開する予定ですので当サークルのTwitterをフォローするなどしてお待ちください。

あとがき

「リードオフマン」、最後までお読みいただきありがとうございました。もしあなたが楽しんでお読みいただけたのならこれほど嬉しいことはありません。これを読んで何か興味深いと思っていただけたなら我々にも書いた甲斐があるというもの。重ねて感謝申し上げます。

また、忙しい中締め切りを守ったり守らなかったりして記事を提出してくれたメンバーのみんなには感謝してもしきれません（もうちょっと全体的に早めに出してくれるといういろいろ楽ですが）。

野球というのはある意味不思議なものだと僕は思っていて、それはなぜ自分が野球を好きなのかわからないからです。けっこう多くの方がそうなのかもしれません。周りに影響されたからというのが大きいでしょうが、ほかのことでは周りから影響されないものだってありますよね。なぜなのか不思議です。でも、理由なんてどうでもいいくらい、野球は僕たちに色んなものをもたらしてくれます。喜びなどの感情の起伏、話のタネ、共感材料、人の縁、そういったものから研究対象まで。何気なく生活に溶け込んで様々なものを与えてくれる野球というものを僕はこれからも愛してやまないでしょう。皆さんもそうだったら嬉しいな。

今後もし SNS やブログなどで見かける機会がありましたら、何卒拡散などよろしく願いします。我らの灘校野球ファンサークルが来年以降ますます繁栄し、皆さんにまた来ていただけることをお祈りして筆をおきます。それでは。

灘校野球ファンサークル第5代総責任者 Marble





リードオフマン 第4巻

(灘校野球ファンサークル 部誌 第4号・2022年文化祭号)

2022年5月2日 初版第一刷発行

編集者 高校2年 兵庫谷亮

編集者 高校3年 中里陽生

発行 灘高等学校・灘中学校

灘校野球ファンサークル

代表発行者 高校3年 中里陽生